仙台市文化財調査報告書第101集

仙台市
高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅵ

昭和62年3月

仙台市教育委員会
仙台市交通局

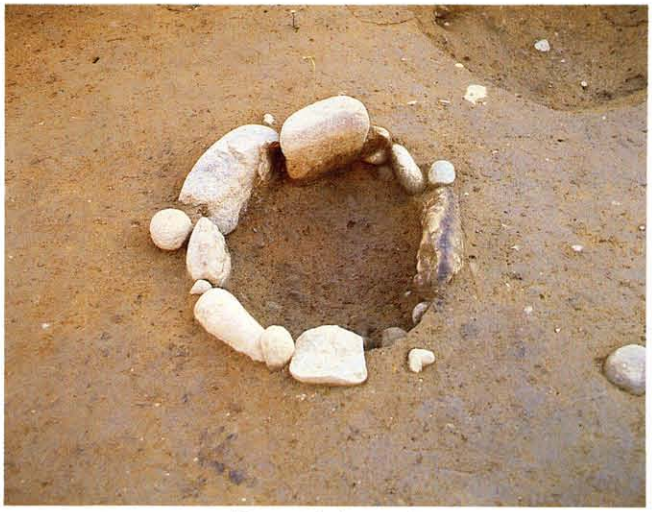
仙台市文化財調査報告書第101集

仙台市
高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅵ

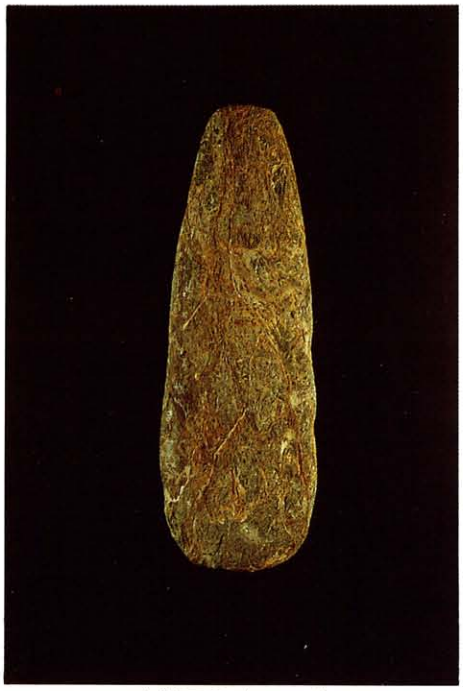
昭和62年3月

仙台市教育委員会
仙台市交通局

ＳＩ４住居跡



炉　跡（ＳＩ４）



磨製石斧（ＳＫ28）

序

仙台市は、高速鉄道の７月開業を間近に控え、21世紀へ向けて東北の中枢都市として飛躍的に発展を遂げております。

文化財保護行政につきましては、日頃、市民のみなさんをはじめ、各関係機関の御理解と御協力をいただき、心から感謝いたしております。文化財は、私達の祖先が豊かな自然環境と長い歴史の中で、伝えられてきた貴重な文化遺産であります。この遺産を保護・保存し、後世へ受け継いでいくことは、私達に課せられた大きな責務であると考えております。

高速鉄道建設に係る発掘調査は、昭和56年度から開始し、６年間を費やし、終了いたしました。この間、６遺跡の発掘調査を実施し、今まで知られていなかった新事実の発見など多くの貴重な成果を得ることができました。今後、これまで蓄積された膨大な量の遺物を整理し、報告していく所存であります。

今年度、最終調査の概報がここに公開されるに当り、各関係機関や関係各位の御指導、御協力をいただいたことに対し、深心なる感謝を申し上げます。さらに、本書が貴重な学問的資料や文化財に対する啓蒙、普及の進展に益々役立つことを念願してやみません。

最後にこうした文化財保護行政に対し、より一層の御支援、御指導をお願い申し上げて御挨拶といたします。

昭和62年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　黎

例　　言

1．本書は、仙台市高速鉄道南北線関係遺跡に係る伊古田遺跡・六反田遺跡における昭和61年度の遺跡発掘調査概報である。

2．本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　Ⅰ・Ⅳ……篠原信彦

Ⅱ・Ⅲ……吉岡恭平

整理作業　佐藤良文、藤沢　敦、小村田達也、木村　浩、加藤若子、後藤幸子、杉船比佐子、高橋朝子、西木広枝、村上祥子、油井ゆかり

編　　集　佐藤良文

3．本書に使用した地図は、国土地理院発行の５万分の１「仙台」を複製した。

4．本書の土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1970）を使用した。

5．本書中の方位角は、真北線を基準としている。

6．本書の遺物実測図のうち、土器・礫石器は３分の１、剥片石器は３分の２の縮尺である。

7．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＢ　建 物 跡

ＳＤ　溝　　跡

ＳＩ　竪穴住居跡・竪穴遺構

ＳＫ　土　　壙

ＳＸ　その他の遺構

8．本書に関係する出土遺物・作成図面・写真については、一括して仙台市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

序　　文

例　　言

Ⅰ．調査経過……1

Ⅱ．遺跡の立地と環境……4

Ⅲ．伊古田遺跡……5

1．遺跡の立地

2．調査の方法

3．調査の概要

Ⅳ．六反田遺跡……11

1．遺跡の立地

2．調査の方法

3．調査の概要

挿図・表目次

第１図　遺跡の位置図……1

第２図　調査区位置図……2

第３図　遺跡の位置と周辺遺跡……3

伊古田遺跡

第４図　グリッド配置図……6

第５図　遺構配置図・平面図……7・8

六反田遺跡

第６図　グリッド配置図……12

第７図　遺構配置図……13・14

第８図　ＳＩ４住居跡……15

第９図　埋設土器遺構・土壙……17

第10図　２号配石遺構……18

第11図　遺物出土状況……19・20

第12図　ＳＩ１住居跡……22

第13図　ＳＢ１建物跡……23

第14図　出土遺物(1)……24

第15図　出土遺物(2)……25

第16図　出土遺物(3)……26

第17図　出土遺物(4)……27

第18図　出土遺物(5)……28

第19図　出土遺物(6)……29

第20図　出土遺物(7)……30

第１表　調査一覧表……1

写真図版目次

伊古田遺跡

写真１　土層断面…… 9
写真２　ピット１～４…… 9
写真３　ＳＫ１土壙…… 9
写真４　ＳＫ２土壙……10
写真５　ＳＫ４土壙……10
写真６　礫層……10

六反田遺跡

写真７　調査区全景（10層）…… 32
写真８　調査区全景（５層）…… 32
写真９　土層断面…… 32
写真10　ＳＩ４住居跡……33
写真11　同セクション……33
写真12　同炉跡……33
写真13　１号埋設土器遺構……34
写真14　２号埋設土器遺構……34
写真15　３号埋設土器遺構……34
写真16　４号埋設土器遺構……35
写真17　５号埋設土器遺構……35
写真18　２号配石遺構……35
写真19　２号配石下土壙（ＳＫ22）……36
写真20　３号配石遺構……36
写真21　土壙群全景（ＳＫ29～33）……36
写真22　ＳＫ13土壙……37
写真23　ＳＫ19土壙……37
写真24　ＳＫ21土壙……37
写真25　ＳＫ46土壙……38
写真26　遺物出土状況（ＳＫ28）……38
写真27　遺物出土状況（包含層）……38
写真28　遺物出土状況（包含層）……39
写真29　遺物出土状況（包含層）……39
写真30　遺物出土状況（包含層）……39
写真31　遺物出土状況（包含層）……40
写真32　ＳＩ１住居跡……40
写真33　同煙道……40
写真34　ＳＢ１建物跡……41
写真35　小溝状遺構……41
写真36　ＳＤ２溝跡……41
写真37　出土遺物(1)……42
写真38　出土遺物(2)……43
写真39　出土遺物(3)……44

Ⅰ．調査経過

仙台市高速鉄道南北線建設に伴う遺跡の発掘調査は、今年で６年目を迎え、４月22日から開始した。調査は伊古田・六反田遺跡の２ヶ所で、12月で終了した六反田遺跡を最後に、高速鉄道南北線に伴う発掘調査を終了した。

第１図　遺跡の位置図

（１．六反田遺跡　２．伊古田遺跡）

伊古田遺跡は、富沢駅に付属する東側の駅前広場に相当する市道「下ノ内・塚田」線に伴う調査であり、８月４日より開始した。この部分は、重機による破壊が著しい所で、調査区の殆どが破壊され、南端の一部の調査を実施し、土壙４基、ピット４個が検出されたのみである。

六反田遺跡は、昭和60年度から継続して市道「下ノ内・六反田」線に伴う調査であり、南側部分を対象に実施した。

今回の調査によって、縄文時代と奈良・平安時代の遺構・遺物が発見された。縄文時代では後期前葉に属する南境式期の竪穴住居跡１軒、埋設土器遺構５基、配石遺構２基、土壙28基、遺物包含層などが検出され、遺構及び包含層から多量の遺物が出土している。

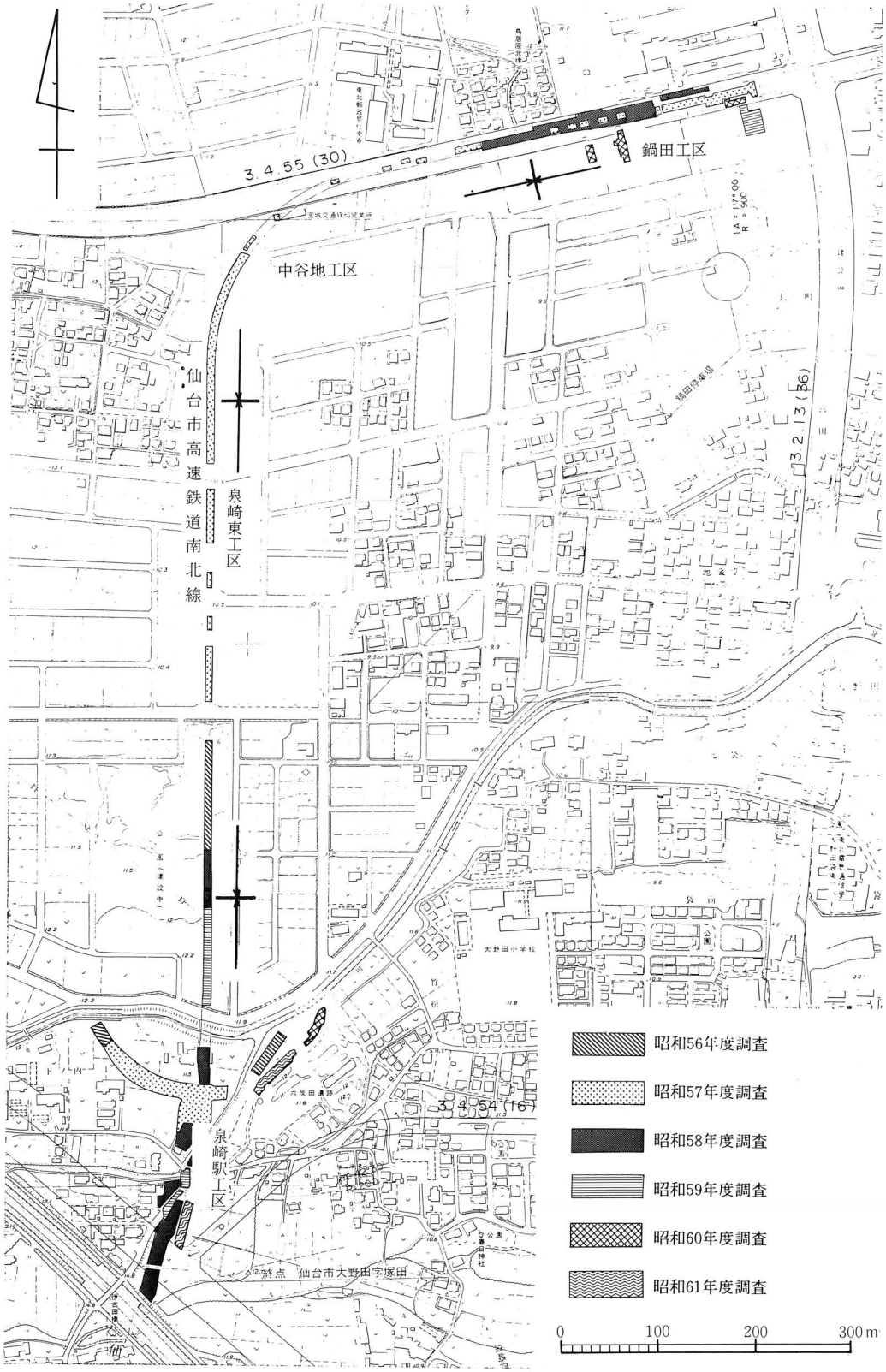
奈良・平安時代では、竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡１棟、溝跡３条のほか、多くの小溝状遺構が検出されている。

このように、今回の調査でも、数々の調査成果が得られている。

高速鉄道建設に伴う野外の調査はこれで終了し、今後は、いままで６年間調査して蓄積された膨大な量の遺物を整理し、報告書を刊行する室内作業を実施していくことである。

第１表　調査一覧表

遺跡名 所在地	時代 種類	調査期間	調査面積	担当職員
伊古田遺跡 仙台市大野田字塚田他	縄文、古墳～平安 集落跡	S61.8.4～ S61.9.5	約54㎡	吉岡恭平
六反田遺跡 仙台市大野田字五反田他	縄文～平安 集落跡	S61.4.22～ S61.12.25	約490㎡	篠原信彦・吉岡恭平・佐藤良文


3.4.55 (30)
鍋田工区
中谷地工区
仙台市高速鉄道南北線
泉崎東工区
3.2.13 (36)
泉崎駅工区
3.4.54 (16)
終点　仙台市大野田字塚田
昭和56年度調査
昭和57年度調査
昭和58年度調査
昭和59年度調査
昭和60年度調査
昭和61年度調査
0
100
200
300 m

第２図　調査区位置図

遺跡番号	遺跡名称	所属時期	遺跡番号	遺跡名称	所属時期
C－196	伊古田遺跡	縄文(後)、古墳～平安	C－054	大野田古墳群	古墳
C－197	六反田遺跡	縄文(中・後・晩)、弥生～平安	C－106	三神峯遺跡	縄文(早・前・中)
C－299	下ノ内遺跡	縄文(中・後)、弥生～平安	C－112	大野田遺跡	縄文(後)、奈良、平安
C－300	下ノ内浦遺跡	縄文(早・前・後)、弥生～中世	C－152	鍛冶屋敷A遺跡	奈良、平安
C－301	富沢遺跡	縄文～近世	C－153	堀ノ内遺跡	古墳～平安
C－007	砂押古墳	古墳	C－155	原東遺跡	古墳～平安
C－008	裏町古墳	古墳	C－156	裏町東遺跡	平安
C－014	教塚古墳	古墳	C－195	富沢上ノ台遺跡	奈良、平安
C－015	金洗沢古墳	古墳	C－199	袋東遺跡	古墳、奈良、平安
C－017	金岡八幡古墳	古墳	C－201	富沢清水遺跡	奈良、平安
C－031	土手内横穴群	奈良、平安	C－203	砂押屋敷遺跡	平安
C－038	王の壇古墳	古墳	C－233	山口遺跡	縄文(早～晩)、弥生～中世
C－039	春日社古墳	古墳	C－266	元袋Ⅱ遺跡	縄文(後)、奈良、平安
C－040	五反田古墳	古墳	C－267	元袋Ⅲ遺跡	奈良・平安
C－043	鳥居塚古墳	古墳	C－427	土手内窯跡	平安
C－046	五反田箱式石棺	古墳	C－520	富沢館跡	奈良、平安、中世
C－052	五反田木棺墓	古墳	C－658	元袋古碑群	中世

第3図　遺跡の位置と周辺遺跡

Ⅱ．遺跡の立地と環境

仙台市高速鉄道南北線は、七北田を起点とし、七北田丘陵、仙台市街地をのせる段丘群を南下し、広瀬橋付近から宮城野海岸平野へ入り、終点泉崎に至る。今年度の調査は、昨年度に引き続き宮城野海岸平野の中の郡山低地において行なわれた。郡山低地は北東縁を広瀬川、南縁を名取川、北西縁を長町一利府線により画されている。ここには広瀬・名取両河川により形成された自然堤防、後背湿地が見られる。自然堤防は広瀬川右岸・名取川左岸に見られ、名取川左岸には旧笊川が曲流している。また郡山低地の中央には南北に走る自然堤防が見られる。これら自然堤防の背後には後背湿地が広がっている。

調査対象区域は、郡山低地の中でもその西半部である。ここには北半の鳥居原、中谷地、泉崎に広範な後背湿地が広がり、南半の下ノ内、大野田には自然堤防が見られる。調査は、伊古田･六反田遺跡で行なわれた。両遺跡とも名取川により形成された自然堤防上に立地している。

この郡山低地西半部及びその周辺は仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域であり、とくに重層構造の遺跡が多数存在することが近年の調査で明らかにされている。南半においてその発端となったのは昭和51年に実施された六反田遺跡の調査である。その後昭和56年に開始された高速鉄道関係の遺跡一伊古田・下ノ内・下ノ内浦遺跡、昭和53・56・57年の山口遺跡、昭和59年の六反田遺跡などが次々と調査された。それらの成果によりこの地域には、縄文時代早期前葉から中期・後期・晩期、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世、近代、そして現代に至るまでの人間活動の痕跡が、地表下約２～４ｍの土層に刻み込まれていることが明らかになった。北半にある富沢遺跡(注１)は、昭和57年の山口遺跡における平安時代の水田跡の発見を契機とし、同年実施された高速鉄道関係遺跡調査で弥生時代と平安時代の水田跡が検出されたことにより認識されるに至った。昭和59年度までの調査により弥生時代２時期、平安時代２時期、中世１時期の水田跡の存在が明らかになっていたが、さらに昭和60年度の都市計画街路長町一折立線に伴う調査で、あらたに弥生時代の３時期の水田跡と古墳時代の水田跡が検出されている。

その他には縄文時代の遺跡として三神峯遺跡・大野田遺跡・元袋Ⅱ遺跡などがある。古墳時代の遺跡は数多く、西多賀周辺には裏町古墳・金洗沢古墳・砂押古墳等が、大野田には鳥居塚古墳・王の壇古墳・春日社古墳、大野田１号・２号古墳等がある。また、富沢遺跡の北には金岡八幡古墳が、西南部には教塚古墳(注２)がある。中世では新笊川の南に富沢館跡がある。

尚、郡山低地西半部は旧来自然堤防上に集落や畑が営まれ、後背湿地には水田が広がっていたが、近年行なわれた土地区画整理及び高速鉄道建設に伴い、開発化が急速に進み、その景観は変貌の一途をたどっている。

（注１）60年度の調査成果より､｢富沢水田遺跡」から「富沢遺跡」へと名称を変更した。

（注２）昭和61年に埋蔵文化財研究所に調査され、壊滅している。

Ⅲ．伊古田遺跡（C－196）

１．遺跡の立地

伊古田遺跡は、東北本線長町駅から南西へ約２km、名取川およびその支流である旧笊川とによって形成された自然堤防上に立地する。昭和58・59年度の調査により(注)、縄文時代後期中葉、古墳・奈良・平安時代にかけての複合遺跡であることが判明している。隣接する遺跡として六反田・下ノ内・下ノ内浦・山口遺跡などが存在する。今回調査した部分は、仙台市高速鉄道富沢駅東側の市道下ノ内・塚田線部分である。

２．調査の方法

今回の調査対象区域は、58年度調査済のⅠ区の東側に接した南北72.5m、東西12m、面積約870㎡の部分である。盛土掘削中に58年度調査時にも確認されていた大規模な攪乱が、調査予定部分の大半に及ぶことが判明したため、調査は比較的攪乱の浅い南端部約54㎡、Ⅰ～K－22～24グリッドについて実施した。旧表土が残存していたのはトレンチ南東隅のK－22グリッドの三角形部分わずか1.4㎡だけである。

３．調査の概要

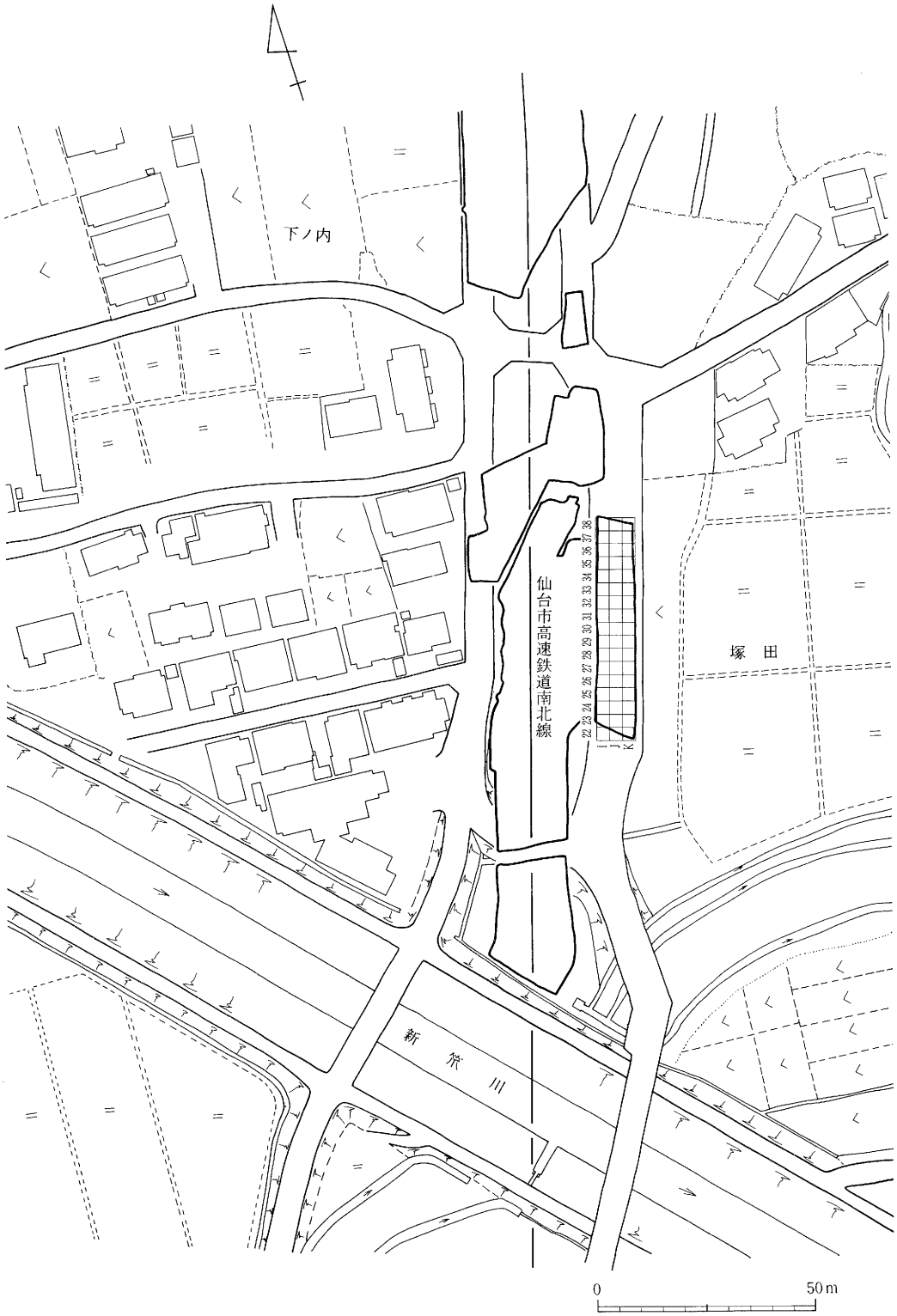
基本層位　基本層は攪乱を免れた東壁とK－22グリッドにおいて確認された。（第５図、写真１）。１層は盛土以前の畑の耕作土、２層は黒褐色シルト、3a層は暗褐色シルトで、ピット１～４の検出面である。４層はにぶい黄褐色細砂でＳＫ３・４の検出面である。3b・3c・４層およびそれ以下約２ｍの地層は河川跡の堆積土で、その下位が礫層になる。この礫層は58年度調査Ⅰ区で検出した礫層の延長であり、その標高は9.6～9,9mである。(注)

遺構と遺物　K－22グリッドの3a層でピット４個（第５図　、写真２）が検出された。径が20～30cmの円形で深さは８～33cmである。堆積土は黒褐色シルトで基本層２層に酷似している。４層では土壙４基（第５図３～５）が検出された。ＳＫ１土壙（写真３）はⅠ－24グリッドに位置し、平面形は径65cmの円形で、断面はフラスコ状、深さは45cmである。遺構上部は攪乱の影響を受けており掘り込み面はより上位となる。堆積土中からはロクロ使用、不使用両者の土師器片が出土している。そのなかには底面から出土した甕の口縁部片（頸部くの字状に屈曲、外面刷毛目後横ナデ）や堆積土３層から出土した円錐台状に開く丹塗りの脚部などがある。ＳＫ２土壙（写真４）は不整楕円形の浅い土壙で、ＳＫ３土壙は楕円形で断面U字形の土壙である。ＳＫ４土壙（写真５）は東壁にかかって検出された断面が開いたU字形の土壙である。

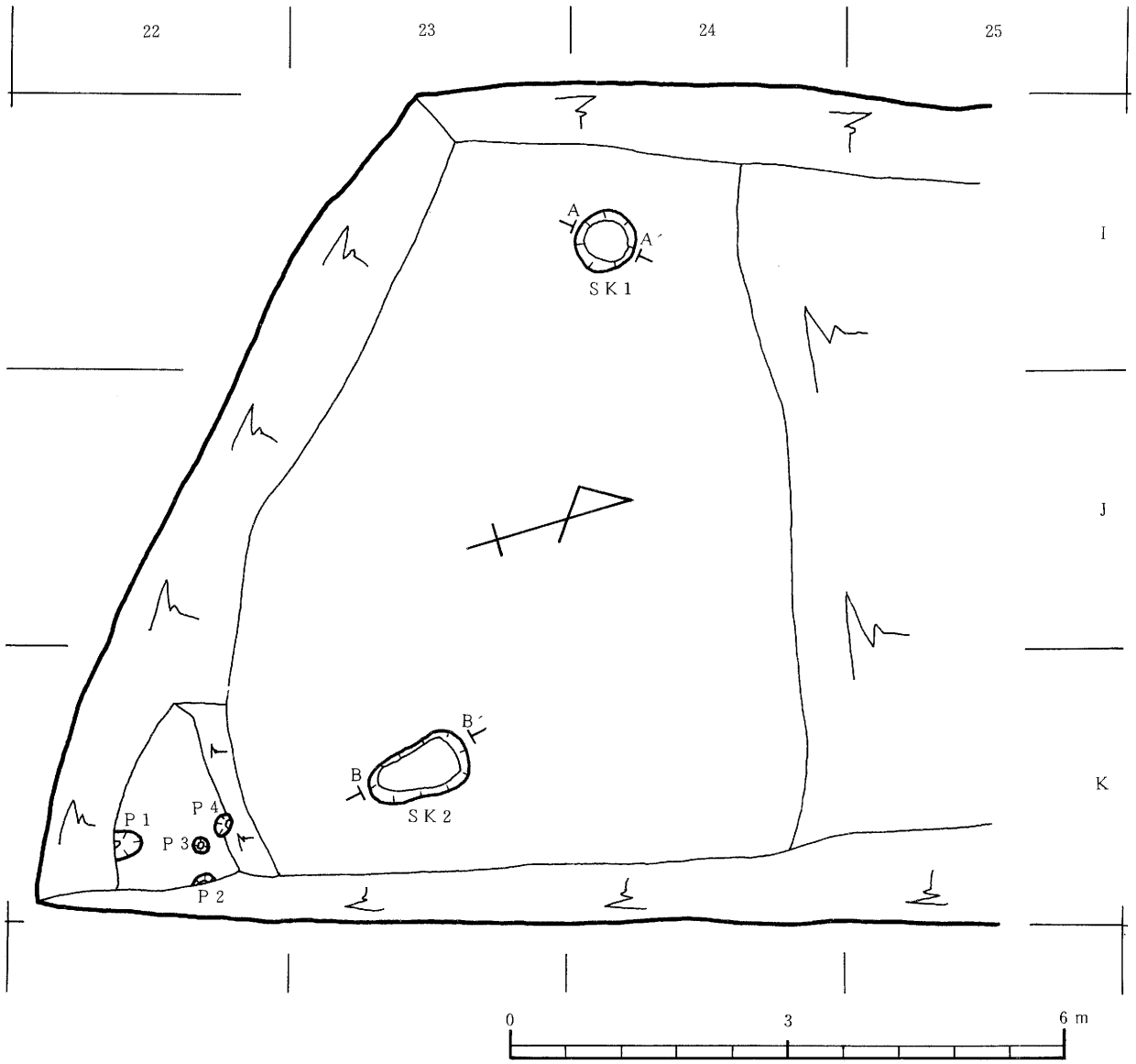
尚、トレンチ南端の状況から、攪乱の影響は南東側へはあまり予想されず、遺構等が更に南東へ展開することが窺えることを指摘しておく。

（注）高橋勝也、1983「Ⅲ．伊古田遺跡」『仙台市文化財調査報告書第69集』p.p.５～22

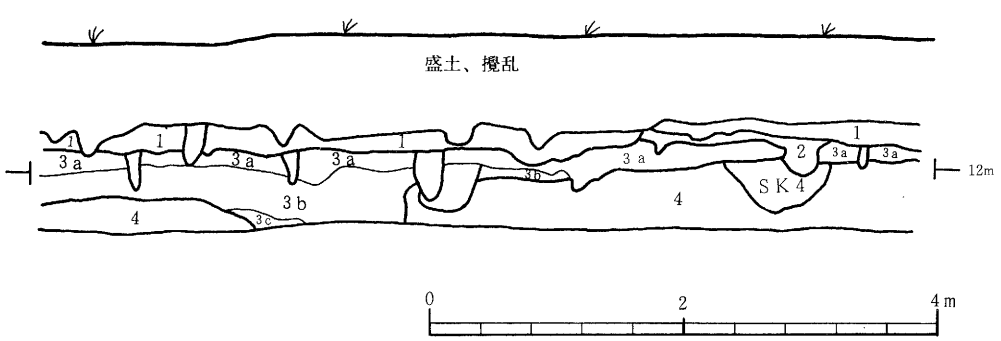
〃　　1984「Ⅲ．伊古田遺跡」『仙台市文化財調査報告書82集』p.p.５～16


下ノ内
仙台市高速鉄道南北線
22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38
I
J
K
塚田
新 笊 川
0
50m

第4図　グリッド配置図

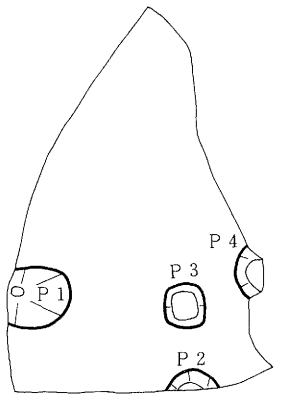


1．遺構配置図



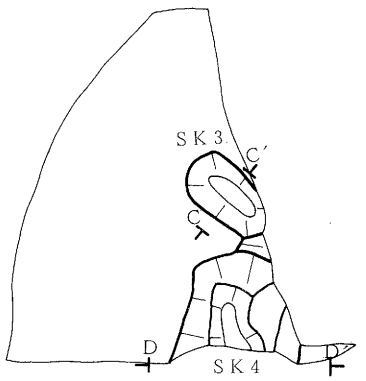
2．東壁土層断面図

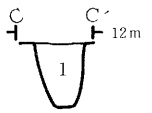
3．ピット1～4



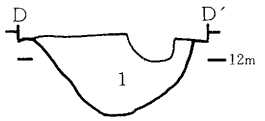
P1～4
7.5YR2/2黒褐色シルト

4．SK3土壙・SK4土壙



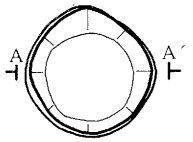


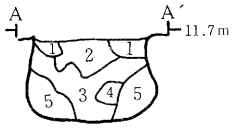
1．10YR3/4 暗褐色 シルト



1．10YR3/4 暗褐色 シルト

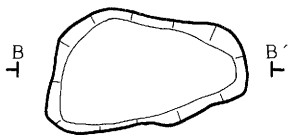
5．SK1土壙

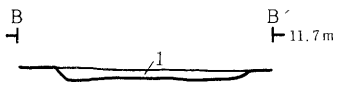




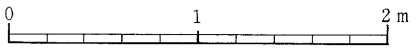
1．10YR3/4　暗褐色　シルト
2．10YR2/3　黒褐色　シルト
3．10YR2/2　黒褐色　粘土質シルト
4．10YR2/3　黒褐色　粘土質シルト
5．10YR5/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト

6．SK2土壙





1．10YR3/4 暗褐色 シルト質砂



1．10YR4/4　褐色　シルト
2．10YR3/2　黒褐色　シルト
3a．10YR3/4　暗褐色　シルト
3b．10YR3/4　暗褐色　砂質シルト
3c．10YR5/2　灰黄褐色　粘土
4．10YR4/3　にぶい黄褐色　細砂

第5図　遺構配置図・平面図

写真1　土 層 断 面

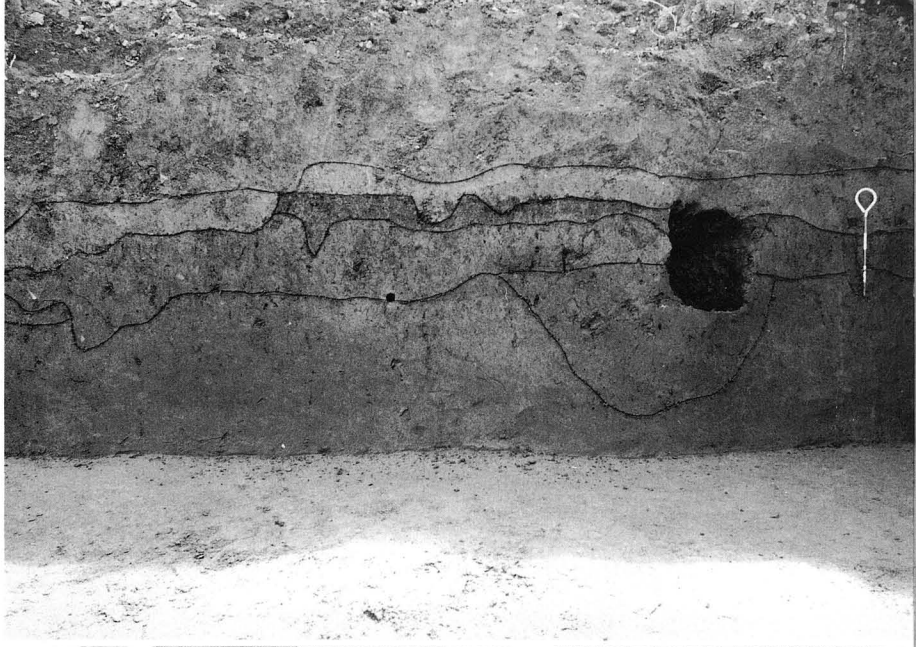


写真2　ピット1～4

写真3　ＳＫ１土壙

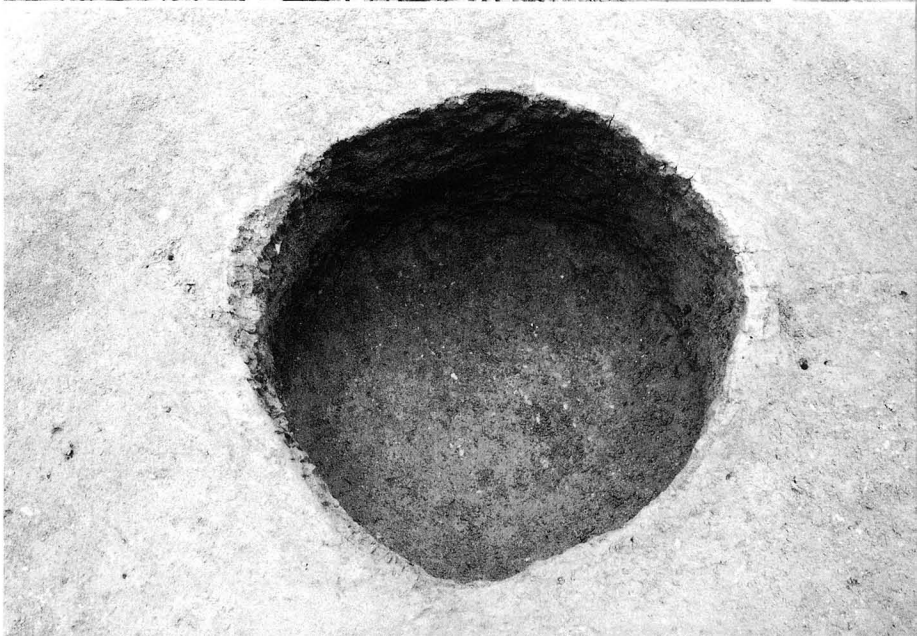


写真４　ＳＫ２土壙

写真５　ＳＫ４土壙

写真６　礫　　層

Ⅳ．六反田（ろくたんだ）遺跡（Ｃ－197）

１．遺跡の立地

六反田遺跡は、東北本線長町駅の南西約1.8km、大野田字五反田・六反田に位置し、名取川によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡の北側を名取川の一支流である旧笊川が曲流している。標高は12ｍ前後である。

周辺には、伊古田遺跡（Ｃ－196）、下ノ内遺跡（Ｃ－299）が隣接し、旧笊川北岸には山口遺跡（Ｃ－233）、下ノ内浦遺跡（Ｃ－300）などが位置し、縄文時代から中世にかけて連綿と続く遺跡が多く存在している（第３図）。

２．調査の方法

市道「下ノ内・六反田」線のうち、昨年度の残り南半分（約900㎡）を対象に約490㎡の調査を実施した（Ⅲ区）。３×３ｍのグリッドを基本とし、短軸（Ａ－Ｄ）、長軸（０～20）を設定した。調査区はＮ－49°－Ｅを基準としている。

３．調査の概要

○基本層位

11層まで確認された。４層は４つに細分され、4b・4c層で平安時代の溝跡（ＳＤ２）、小溝状遺構など、５層上面では奈良時代の竪穴住居跡（ＳＩ１）・掘立柱建物跡（ＳＢ１）・溝跡（ＳＤ５・６）・小溝状遺構などが発見された。５層は弥生土器片を包含する黒褐色粘土質シルト層である。６層～10層まで縄文土器・石器が出土している。特に９層は後期前葉の遺物包含層で、9a（褐色粘土質シルト）・9a-2（にぶい黄褐色粘土質シルト）・9b（黒色粘土質シルト）層に細分され、多量の遺物が出土した。10層はにぶい黄褐色粘土質シルト層で、少量の遺物が出土した。この10層上面で、竪穴住居跡（ＳＩ４）・埋設土器遺構・配石遺構・土壙などが発見された。11層は黄褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色砂、砂礫層と一様ではなく、Ｂ・Ｃ－13・14グリッドは砂礫層が盛り上っている（第７図３、写真９）。

○縄文時代の遺構と遺物

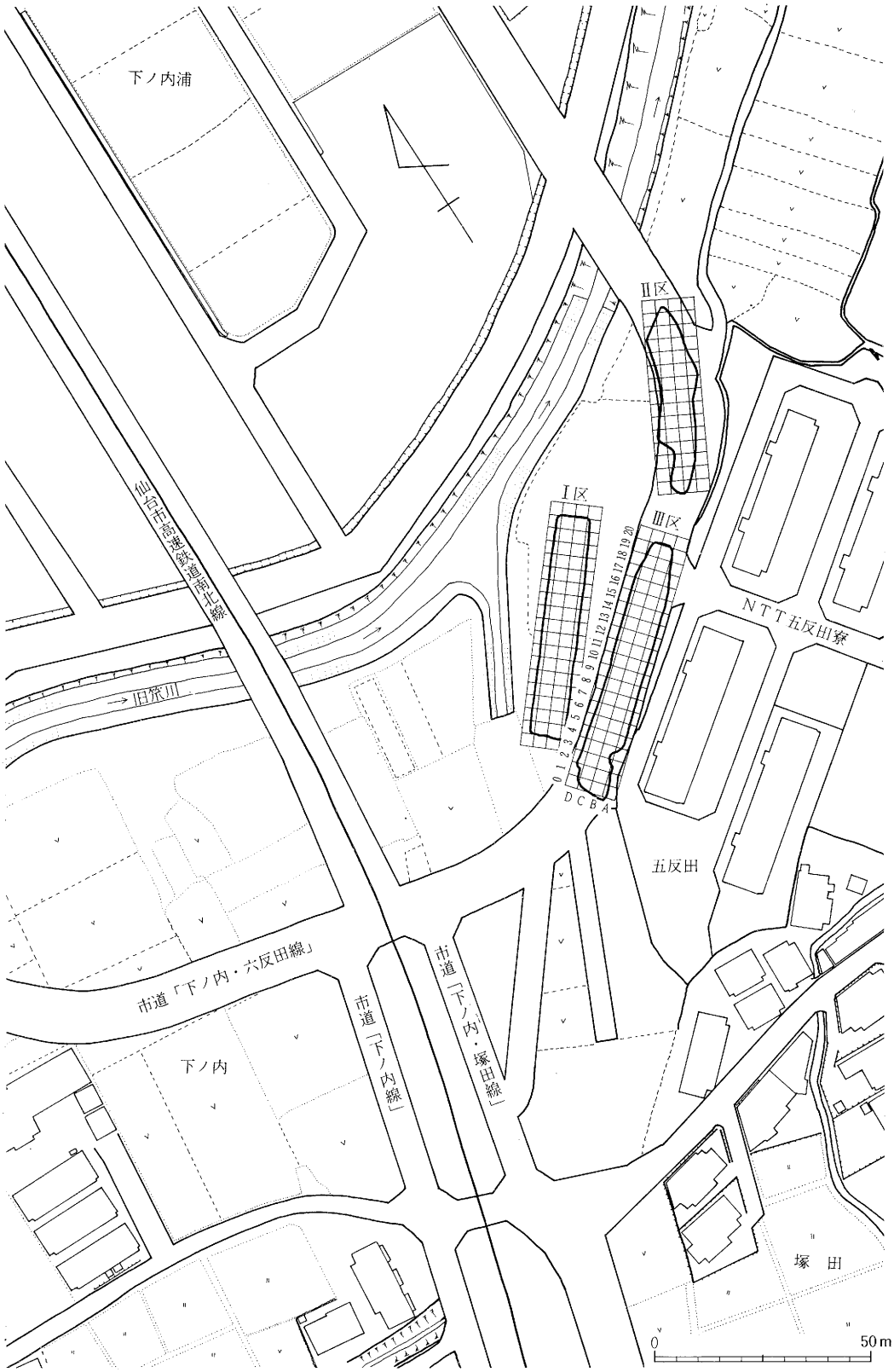
ＳＩ４住居跡（第８図、写真10～12）

〔遺構の確認〕　調査区南西端のＢ・Ｃ－１・２グリッドに位置し、10層上面で検出された。

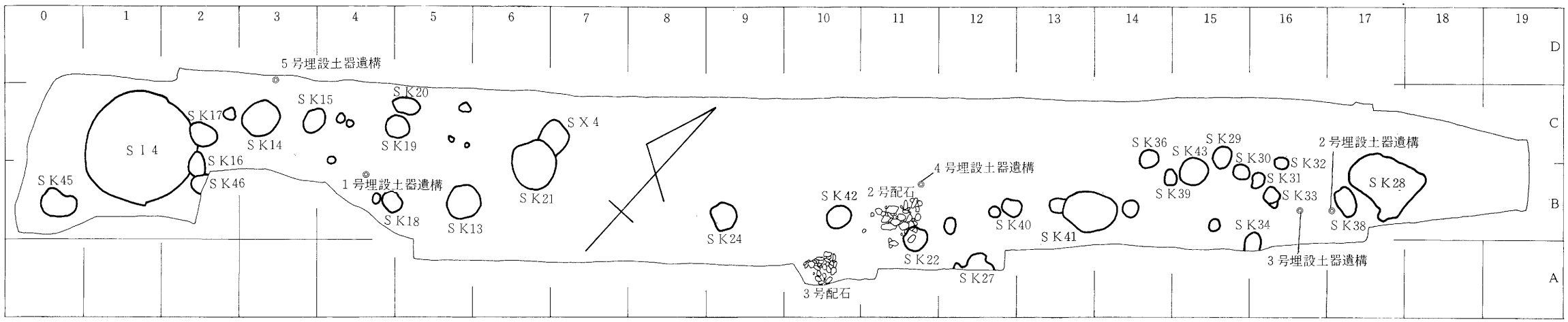
〔重複・増改築〕　ＳＫ16・17土壙に切られる。

〔平面形・規模〕　直径約4.2ｍの円形を呈する。

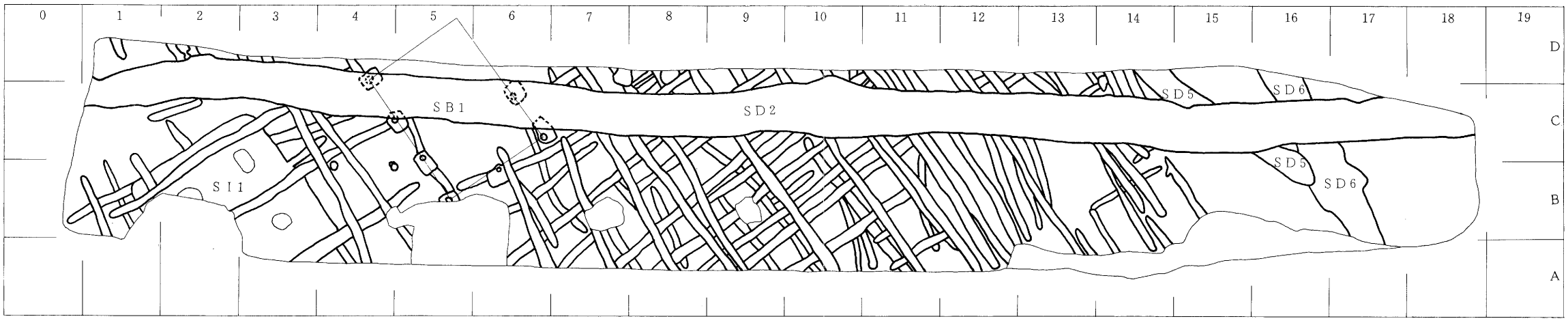
〔堆積土〕　４層に分けられる。１層は最上層で、褐色粘土質シルト層、２層は炭化物を多く混入する暗褐色粘土質シルト層である。共に基本層の９層と考えられる。３層はにぶい黄褐色砂質シルト・砂層で、比較的厚く堆積し、床面のほぼ全体を覆っている。４層は壁付近に堆積


下ノ内浦
Ⅱ区
Ⅰ区
Ⅲ区
仙台市高速鉄道南北線
旧笊川
NTT五反田寮
五反田
市道「下ノ内・六反田線」
市道「下ノ内線」
市道「下ノ内・塚田線」
下ノ内
塚田
0
50m

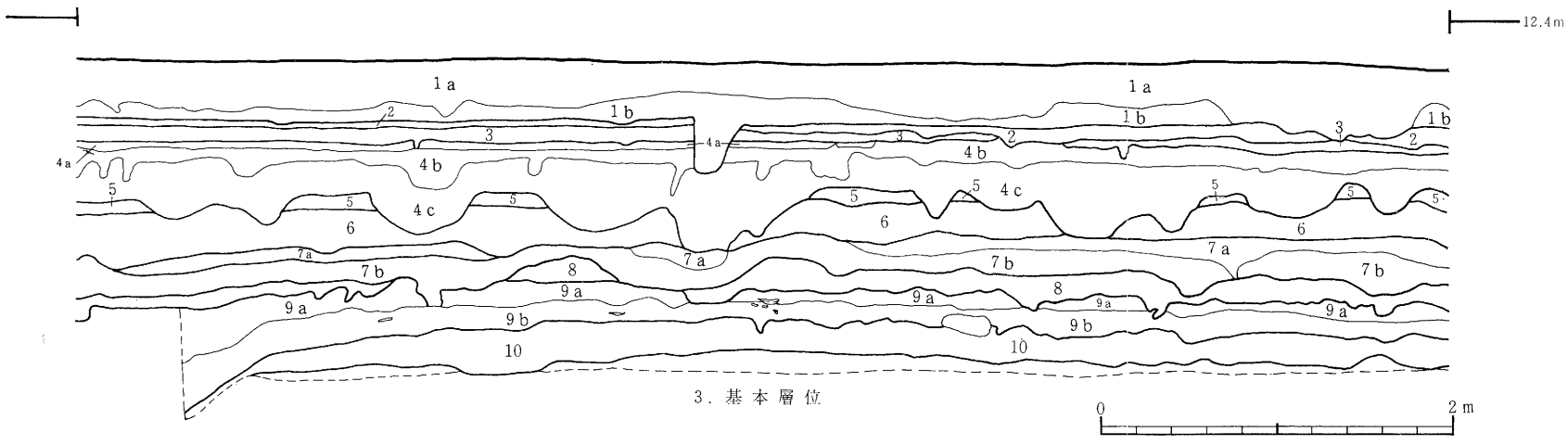
第6図　グリッド配置図



1．縄文時代の遺構



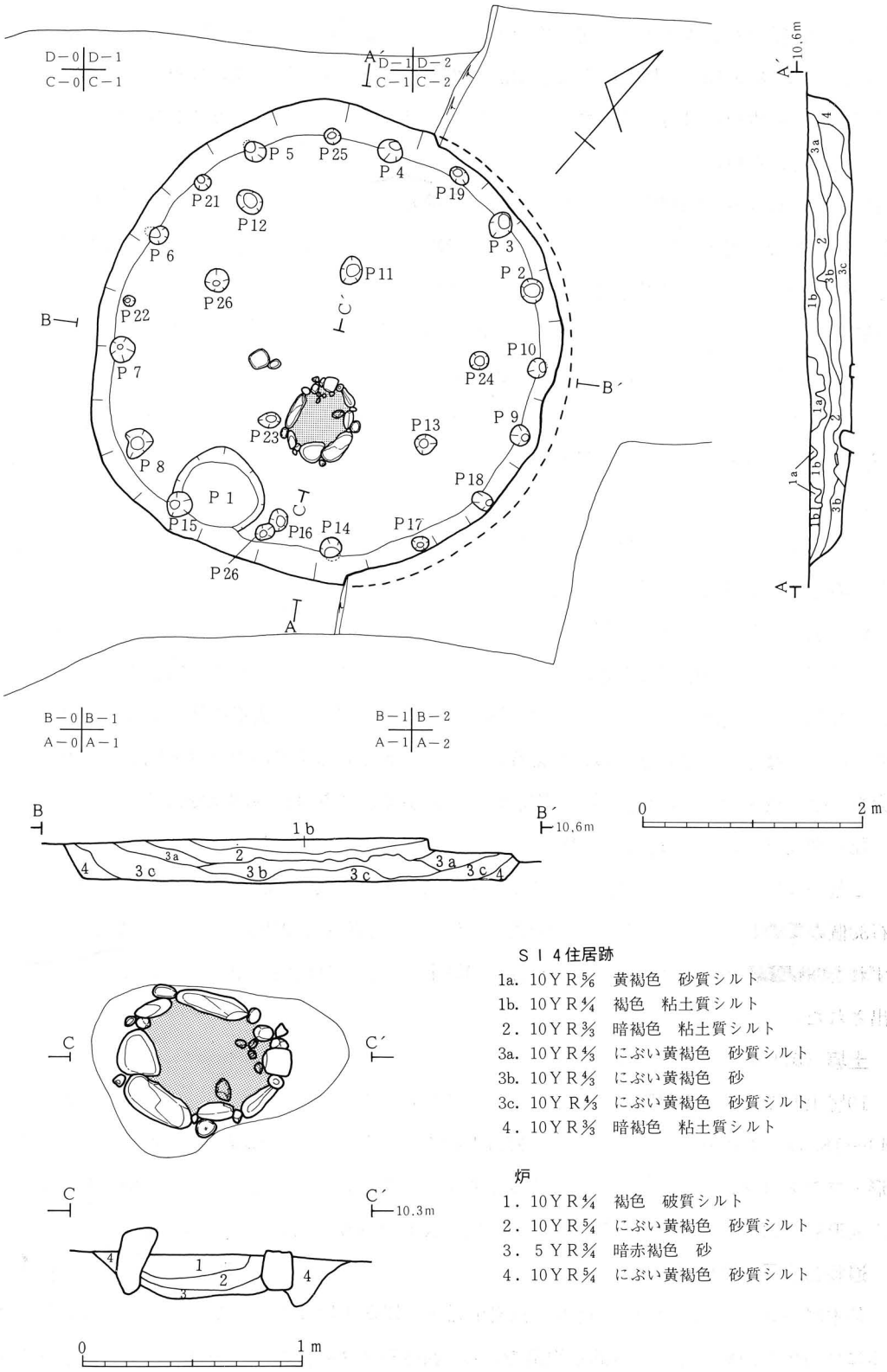
2．古代の遺構



3．基本層位

1a. 表土・盛土
1b. 5YR6/2 灰オリーブ シルト
2. 7.5YR7/8 黄橙色 酸化鉄集積層
3. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト
4a. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト
4b. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト
4c. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト
5. 10YR3/3 黒褐色 粘土質シルト
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト
7a. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト
7b. 10YR5/4 褐色 砂質シルト
8. 10YR5/6 黄褐色 細砂
9a. 10YR4/4 褐色 粘土質シルト
9b. 10YR2/1 黒色 粘土質シルト
10. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト

第7図 遺構配置図



S I 4住居跡

1a. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト
1b. 10YR5/4 褐色 粘土質シルト
2. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト
3a. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
3b. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂
3c. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
4. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト

炉

1. 10YR5/4 褐色 破質シルト
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト
3. 5YR3/4 暗赤褐色 砂
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト

第8図 S I 4住居跡

した暗褐色粘土質シルト層で、住居の最下層である。堆積状況は自然堆積を示している。

〔壁〕　基本層の10・11層を壁とし、壁高は30～40cmで床面より比較的緩やかに立ち上がる。

〔床面〕　基本層の11層をそのまま床面とし、平担であるが軟らかな床である。掘り方、貼り床は認められない。

〔柱穴〕　ピットは26個検出された。そのうち壁及び壁直下で検出された20個のピットは、直径10～20cmの円形を呈し、60～80cmの間隔でめぐる柱穴である。深さは20cmのものが多く、その断面形は住居外側に斜方向に傾くものが多い。

〔貯蔵用ピット〕　P_1は長軸80cm、短軸70cmの楕円形を呈し、深さ10cmである。断面形は浅いU字形で、堆積土中に炭化物・粘土が混入している。

〔炉〕　住居中央から南東に寄って、長軸80cm、短軸65cmの楕円形に河原石を配列した石囲炉が構築されている。掘り方は長軸2.3 m、短軸1.6 mの長楕円形である。炉内部の底面・石は焼けて変色している。

〔出土遺物〕　各層から少量の縄文土器片・石器が出土した。第17図1～4は4層から出土したもので、縄文時代後期前葉の南境式のものである。

埋設土器遺構　（第9図、写真13～17）

5基があり、9a層中で検出された5号を除き、1～4号は10層上面で検出された。2号・3号は2基並んで検出され、完形の深鉢が据えられている。5号は完形の鉢、1号・4号は完形のものではなく、欠損したものが据えられている。掘り方は土器の大きさと同じか、わずかに大きく掘り込んでいる。平面形は楕円形のものが多く、深さは15～30cmである。

配石遺構（第10図、写真18～20）

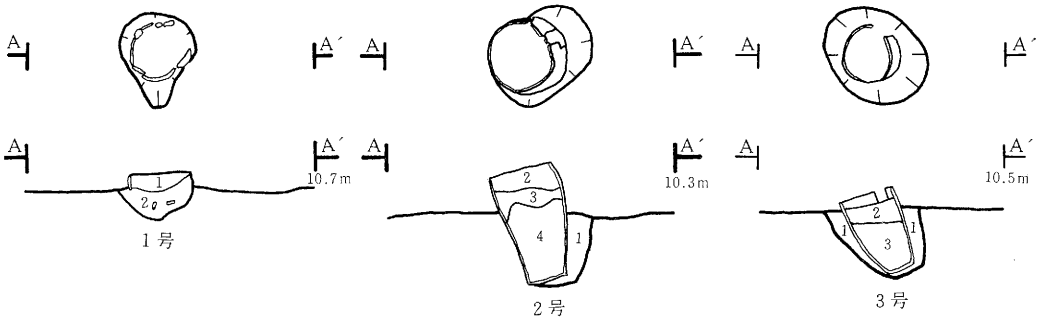
2基が検出された。2号は長軸約2 m、短軸約1.5 mの三角形状の範囲に比較的大きな河原石38個が集中している。3号は2号の南側に位置し、河原石約30個が楕円形状に配している。いずれも9b層で石が検出されている。2号は10層上面で石より南側にややずれて円形の土壙が検出された。

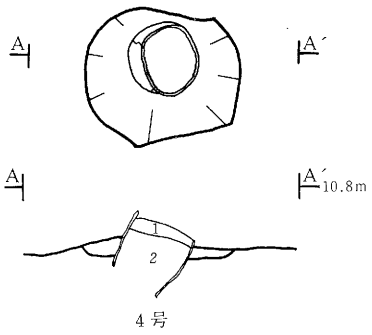
土壙（第9図、写真21～26）

10層上面で検出された土壙は28基である。これらの土壙は円形、楕円形のもので、大きさも40～180 cmのものがあり、深さも10～95cmと種々である。断面形も浅いU字形・U字形・逆台形・フラスコ状のものなどがある。土壙から出土した遺物としては、SK28土壙から蛇紋岩製の大形石斧、SK21土壙から炭化したクルミ、SK46土壙から石皿などがある。

遺物包含層（第11図、写真27～31）

基本層の9（9a・9a-2・9b）層から縄文土器・石器が多量に出土した。この9層は調査区全体に分布する9a層以外は部分的な堆積である。9a-2層はB—14とC—12のグリッドを結ぶ線か





1号埋設土器遺構

1．10YR4/4　褐色　シルト
2．7.5YR4/6　褐色　粘土質シルト

2号埋設土器遺構

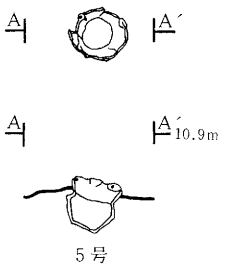
1．10YR4/4　褐色　粘土
2．10YR3/4　暗褐色　粘土
3．10YR3/3　暗褐色　粘土
4．7.5YR4/4　褐色　粘土

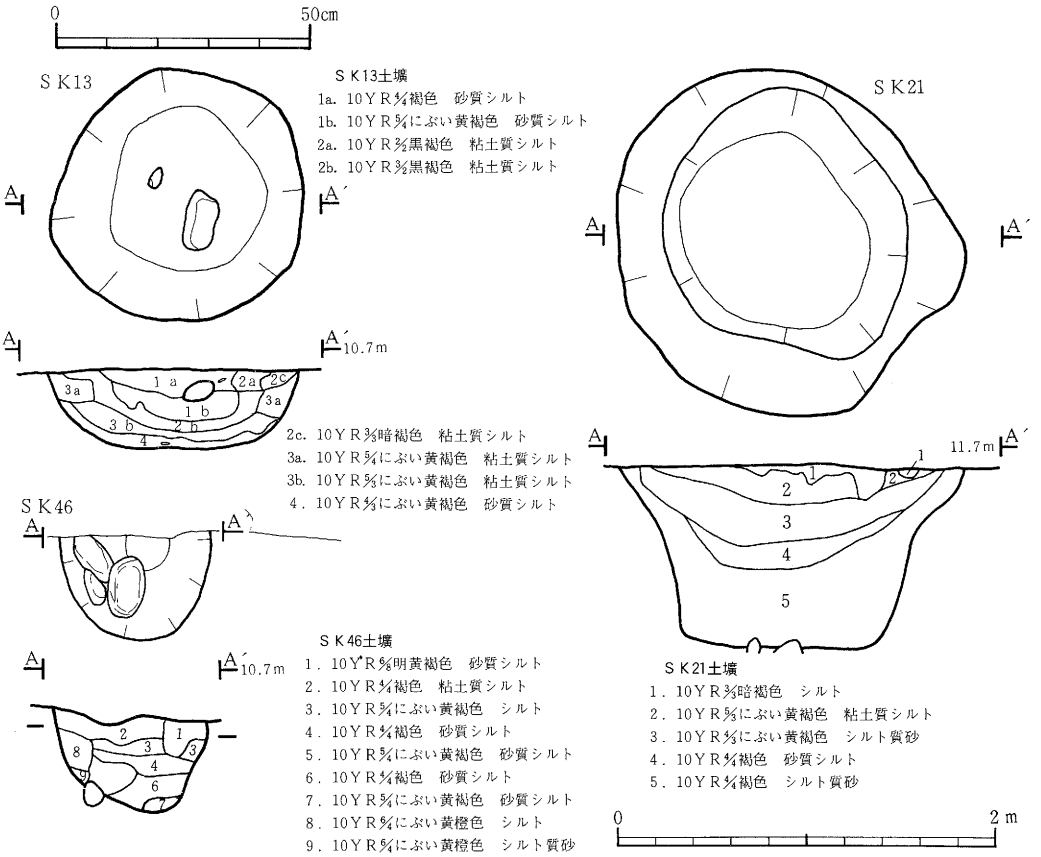
3号埋設土器遺構

1．7.5YR3/2　黒褐色　粘土質シルト
2．7.5YR4/4　褐色　粘土質シルト
3．7.5YR3/2　黒褐色　粘土質シルト

4号埋設土器遺構

1．10YR3/4　暗褐色　粘土質シルト
2．10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土質シルト





SK13土壙

1a. 10YR4/4褐色　砂質シルト
1b. 10YR5/4にぶい黄褐色　砂質シルト
2a. 10YR3/2黒褐色　粘土質シルト
2b. 10YR3/2黒褐色　粘土質シルト
2c. 10YR3/3暗褐色　粘土質シルト
3a. 10YR5/4にぶい黄褐色　粘土質シルト
3b. 10YR5/4にぶい黄褐色　粘土質シルト
4．10YR5/4にぶい黄褐色　砂質シルト

SK46土壙

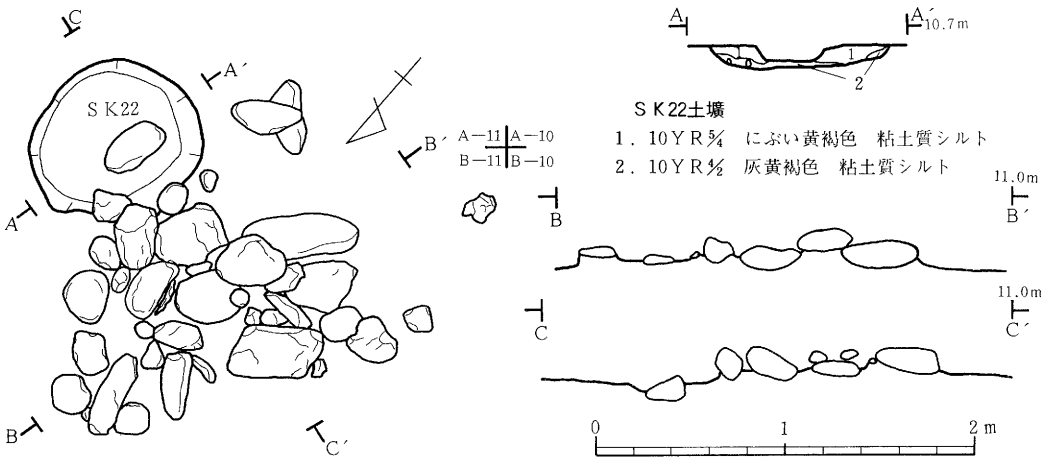
1．10YR5/6明黄褐色　砂質シルト
2．10YR4/4褐色　粘土質シルト
3．10YR5/4にぶい黄褐色　シルト
4．10YR4/4褐色　砂質シルト
5．10YR5/4にぶい黄褐色　砂質シルト
6．10YR4/4褐色　砂質シルト
7．10YR5/4にぶい黄褐色　砂質シルト
8．10YR5/4にぶい黄橙色　シルト
9．10YR5/4にぶい黄橙色　シルト質砂

SK21土壙

1．10YR3/3暗褐色　シルト
2．10YR5/3にぶい黄褐色　粘土質シルト
3．10YR5/3にぶい黄褐色　シルト質砂
4．10YR4/4褐色　砂質シルト
5．10YR4/4褐色　シルト質砂

0　2m

第9図　埋設土器遺構・土壙



第10図　2号配石遺構

ら東側が河川の影響のため、北側に傾斜する一部に分布する層であり、9b層はＳＩ４付近とＢ―４とＣ―11のグリッドを結ぶ線から19ラインまで分布する層である。遺物は各層から出土しているが、特に炭化物を多量に混入、あるいは炭化物のみの層である9b層が多量に出土している。その出土状況は層中及び層理面に沿って、一括遺物、大形の破片などが一定の面をなした状態で、あるいは折り重った状態で出土している。

○出土遺物

土　　器（第14～20図、写真37～39）

調査で発見された縄文土器は、大部分遺物包含層から出土し、その他には、ＳＩ４住居跡・埋設土器遺構・配石遺構・土壙などから出土している。これらのうち、図化できたものは６個体で、深鉢、鉢、注口土器である。

第14図１は５号埋設土器で、体部上半が内弯し、頸部が「く」字状が外反する鉢である。口縁部は大小の突起が３個つく。頸部は無文で、体部には、８字状隆線、盲孔、沈線により渦付三角文があり、沈線間・渦文部にＬＲ縄文が充填される。

同２は9a-2層出土の深鉢で、口縁部・体部がほぼ直線状に外傾する。口縁部は無文で山形突起５個がつく。口縁部と体部は一条の沈線で区画され、盲孔・ボタン状隆線(ボタン状貼付文)がつく。体部の文様は沈線による蕨手状文６単位で、沈線間は磨消縄文が用いられているが、丁寧な磨きでなく、縄文が残っている。地文はＬ縄文であるが一部にＬＲ縄文がある。

第15図１は10層出土の深鉢で、口縁部・体部がほぼ直線状に外傾する。口縁部は半円状の隆線が５単位貼付けられ、体部上半は２列に鱗状刺突文が隆線に沿うように波状につけられ、さらに隆線の単位間ごとに下垂する刺突文が５単位つけられている。地文はＬＲＬ縄文である。

同２は9b層出土の深鉢で、口縁部と体部下半を欠損している。体部上半が内弯し、頸部がく

15
16
17
18
19
D
C
B
A
Po90
Po91
Po92
Po93
Po78
Po84
Po81
Po83
Po82
Po71
Po88
Po69
Po80
Po72
Po70
Po89
Po85
Po74
Po75
Po76
Po77
Po106
Po86
Po87
Po105
0
1
2
3m

第11図　遺物出土状況

びれる器形で、体部との境には沈線と刺突文を施す隆線で区画され、８字状隆線、ボタン状隆線がつけられる。体部の文様は横に連なる沈線区画の渦付三角文が２段に施され、地文はＬＲ縄文である。

第16図１は9b層出土の小形の注口土器である。注口部は体部上半につき、注口部に小突起、対面に把手あるいは環状の小突起がつく。体部文様は沈線による曲線の文様で、地文はR(r)撚糸文である。

同２は10層出土の注口土器で、体部中央に最大径があり、体部上半が内弯し、口縁部が外反する。橋状把手が２個向い合い、一方の把手に注口がつく。把手には沈線と刺突文が施される。口縁部は一条の沈線と刺突文が施される。文様は体部上半に限定され、沈線による三角文、盲孔が施される。三角文部には植物の茎状のもので描いた細い条線が充塡される。

その他、第17・18図のようなものが出土している。１～５はＳＩ４住居跡３・４層出土、他は9a層出土のものである。隆線に刺突文のあるもの・連鎖状のもの（４・６～９・18・28)、８～10は同一個体で、剣状文のもの、さらに蕨手文（12・13・17・18・22)、ジグザク文・連続Ｓ字状文（１・15・16・19・20・26・29）などのものがある。

これらの土器は、縄文時代後期前葉の南境式に属するものである。未整理のものが多くあるため、不確定であるが、多条沈線のものは今のところ出土していないようである。

石　　器（第19図・20図、写真39）

ＳＩ４住居跡、埋設土器遺構、配石遺構、土壙、遺物包含層から剝片石器、礫石器が多く出土している。剝片石器には石鏃（第19図１～８)、石錐（同９・12)、石ヒ（同14・15)・ヘラ状石器（同11・13）などがあり、礫石器には、磨石（第20図17)、凹石（同18)、石皿（同19）が出土している。これらの石器の時期も縄文時代後期前葉の南境式期のものである。

○奈良・平安時代の遺構と遺物

基本層の４・５層で検出され、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、小溝状遺構などがある。

ＳＩ１住居跡（第12図、写真32・33）

〔位置・確認面〕　Ⅲ区、Ａ～Ｃ－２～５グリッドに位置し、５層上面で検出された。電柱があるため、住居全体を検出できなかった。

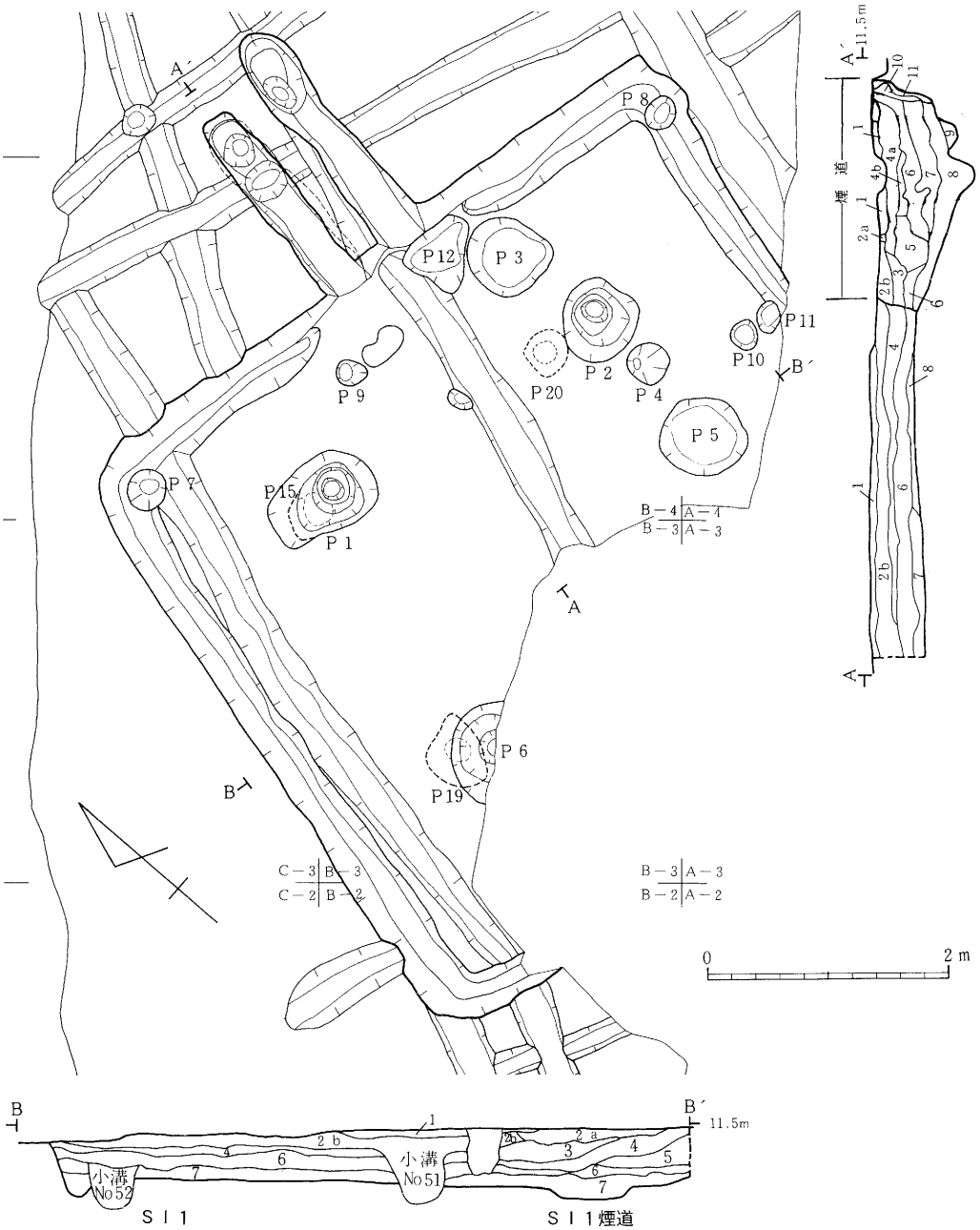
〔重複・増改築〕　小溝状遺構と重複する。煙道２基、柱穴が二時期あり、改築している。

〔平面形・規模〕　北辺で5.8m、西辺で5.7mの方形を呈し、主軸方向Ｎ－７°－Ｅである。

〔堆積土〕　８層に分けられ、７・８層が床面を覆う層である。堆積状況は自然堆積を示す。

〔床面〕　床は貼床と基本層の８層をそのまま床としている。平坦で、煙道部のある周辺の床は堅くなっているが、それ以外は軟らかである。

〔壁〕　基本層の６・７層を壁とし、北壁、西壁、南・東壁の一部が検出された。壁高は周溝



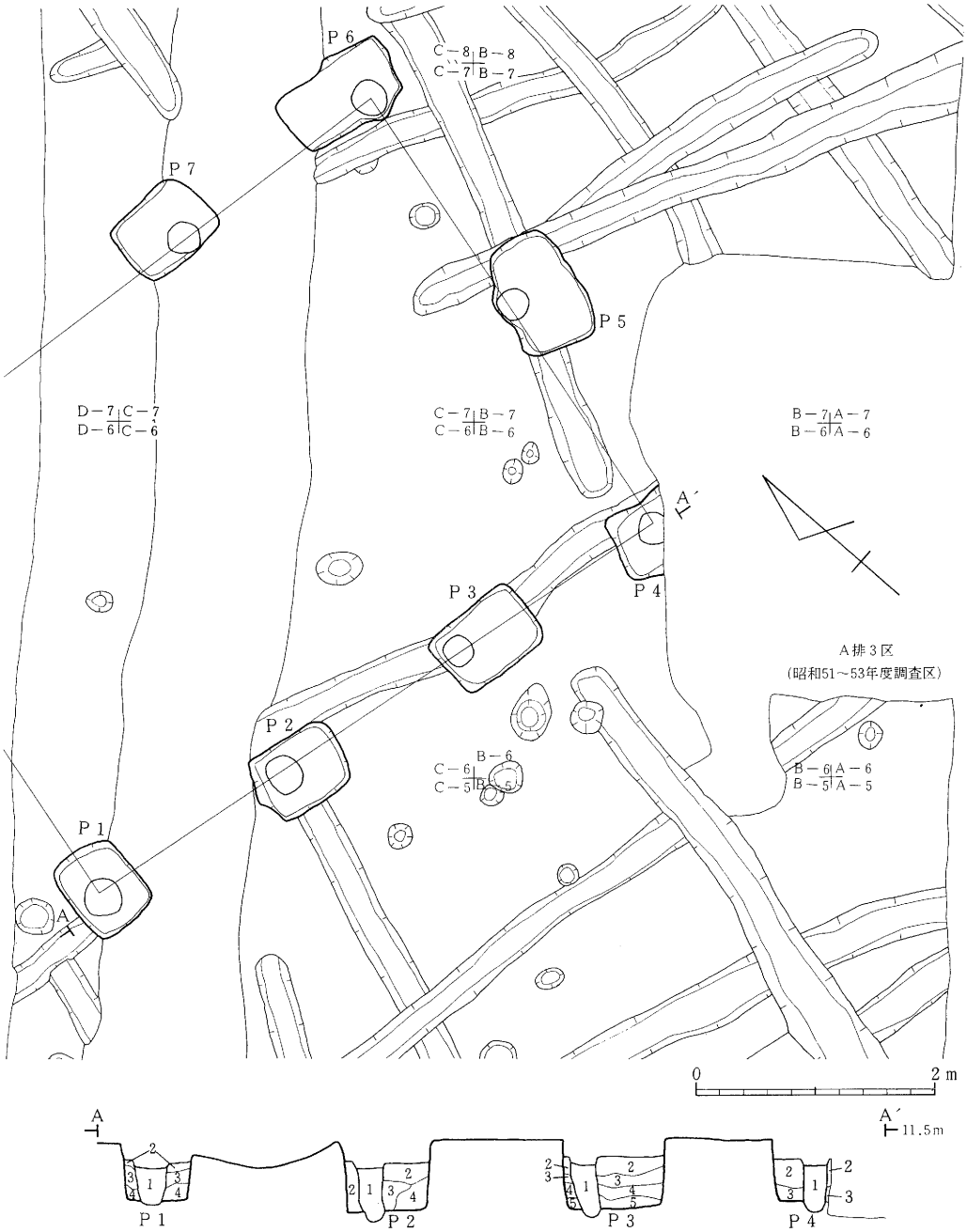
SI1

1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト
2a. 10YR4/4 褐色 シルト
2b. 10YR4/4 褐色 シルト
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト
5. 10YR4/4 褐色 粘土質シルト
6. 10YR4/4 褐色 粘土質シルト
7. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト
8. 5YR5/6 明赤褐色 粘土質シルト

SI1煙道

1. 10YR4/4 褐色 シルト
2a. 7.5YR4/3 褐色 シルト
2b. 7.5YR4/3 褐色 シルト
3. 7.5YR3/4 暗褐色 粘土質シルト
4a. 7.5YR4/4 褐色 粘土質シルト
4b. 7.5YR4/4 褐色 粘土質シルト
5. 7.5YR4/4 褐色 粘土質シルト
6. 7.5YR4/3 褐色 粘土質シルト
7. 10YR4/4 褐色 シルト質粘土
8. 10YR4/6褐色と10YR5/2灰黄褐色がまじる 粘土
9. 10YR4/4 褐色 粘土
10. 10YR4/4 褐色 シルト
11. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト

第12図 SI1住居跡



P 1

1．10YR3/3　暗褐色　シルト
2．10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
3．10YR4/4　褐色　シルト
4．10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土質シルト

P 2

1．10YR4/2　灰黄褐色　粘土質シルト
2．10YR3/4　暗褐色　シルト
3．10YR5/2　灰黄褐色　粘土質シルト
4．10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト

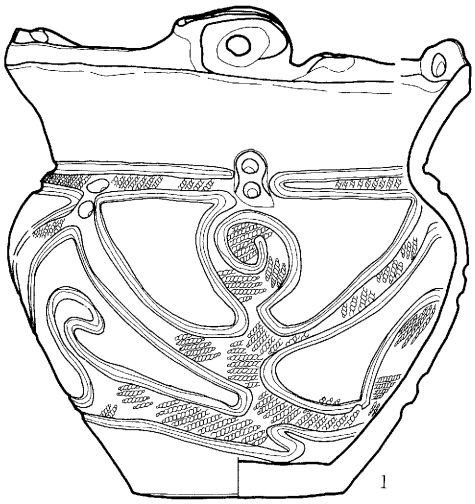
P 3

1．10YR4/4　褐色　シルト
2．10YR3/3　暗褐色　シルト
3．10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
4．10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト
5．10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト

P 4

1．10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
2．10YR3/3　暗褐色　シルト
3．10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト

第13図　ＳＢ１建物跡



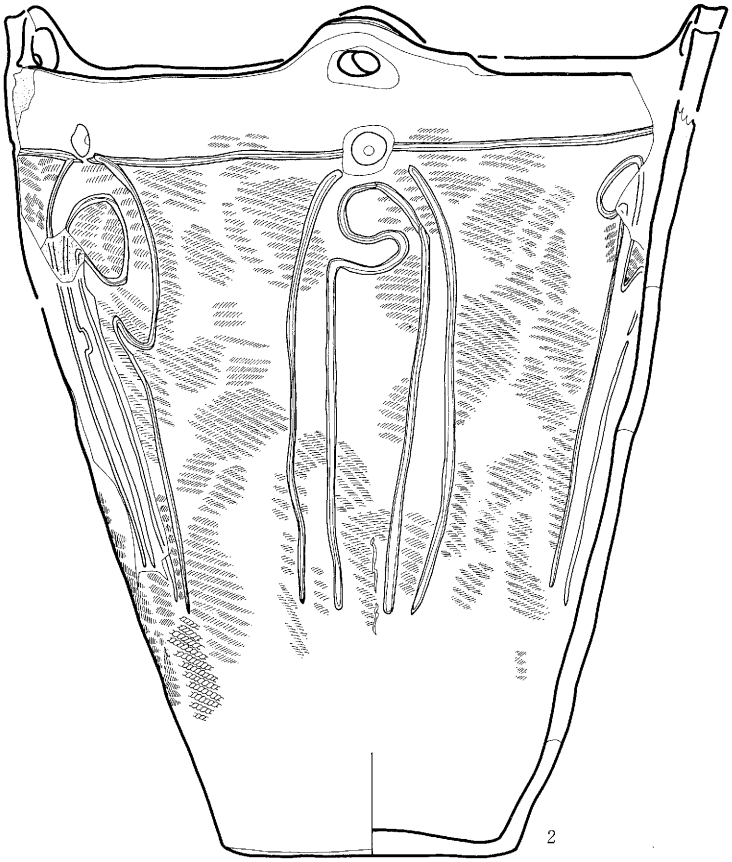
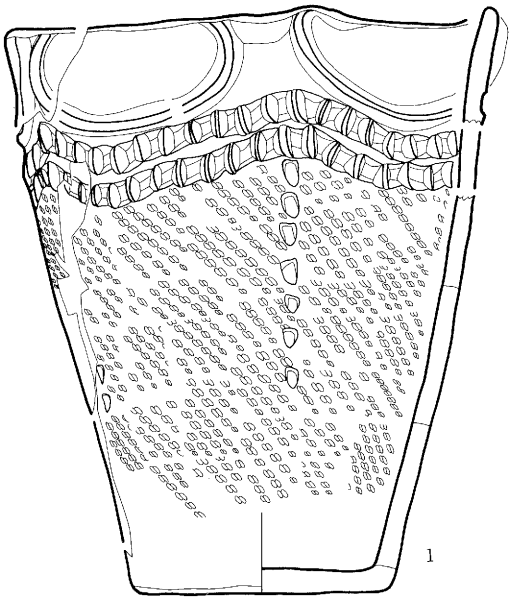
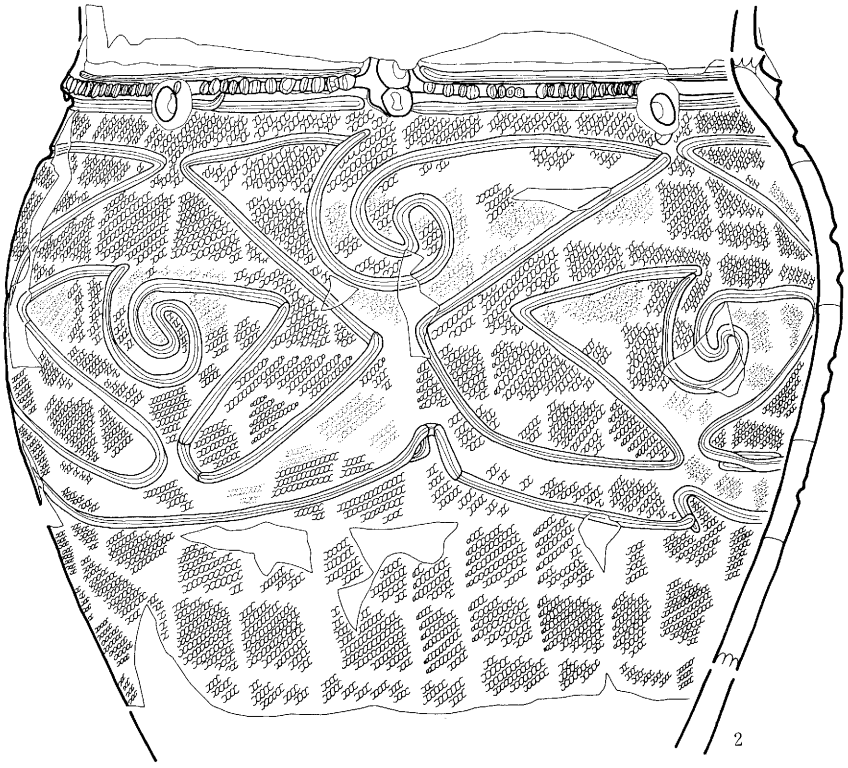


図	遺構・層位	口径cm	器高cm	底径cm	文様の特徴	遺物番号
1	5号埋設土器	18.0	19.3	8.4	ボタン状隆線、盲孔、渦付三角文、充填縄文LR	Po−25
2	BC18区・9a−2層	27.4	33.5	11.7	ボタン状隆線、盲孔、蕨手状文、縄文L、LR	Po−69

第14図　出土遺物 (1)　(縮尺1/3)



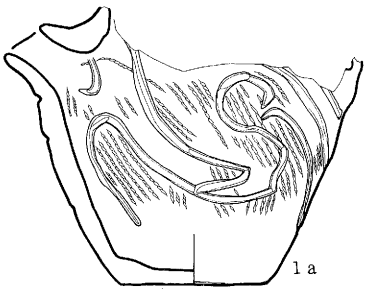
1

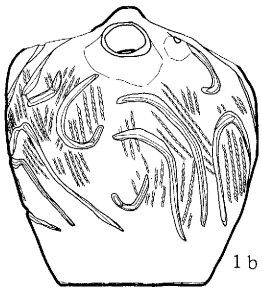


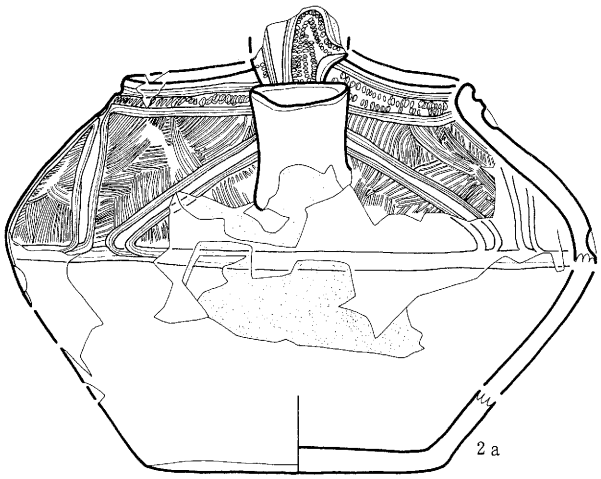
2

図	遺構・層位	口径cm	器高(残存高)cm	底径cm	文様の特徴	遺物番号
1	B19区・10層	18.8	23.1	9.6	隆線文、鱗状刺突、縄文LRL	Po−74・76
2	B19区・9b層	——	(28.1)	——	隆沈線、刺突、渦付三角文、縄文LR	Po−72・80

第15図　出土遺物 (2)（縮尺1/3）







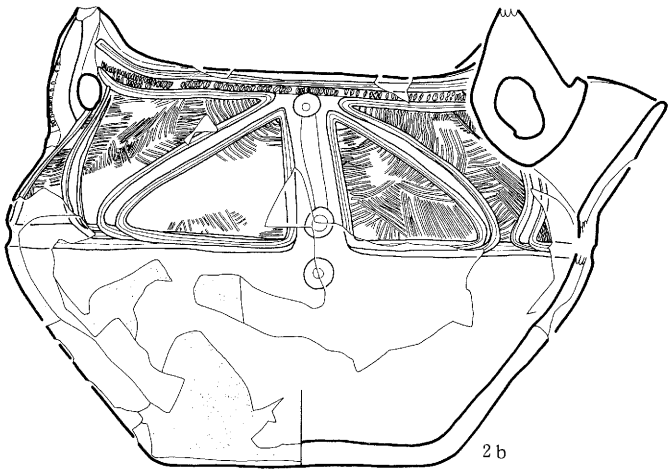
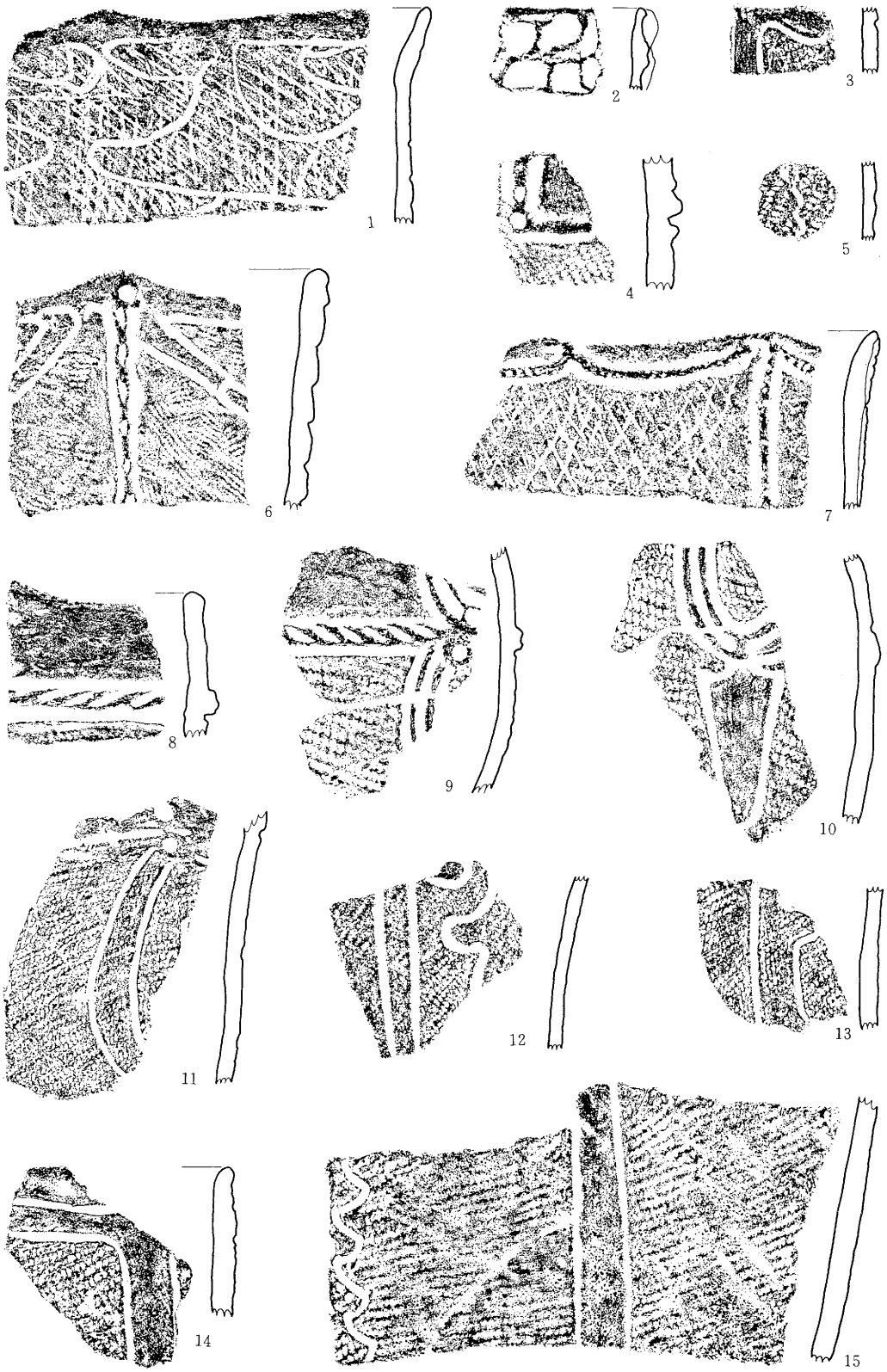
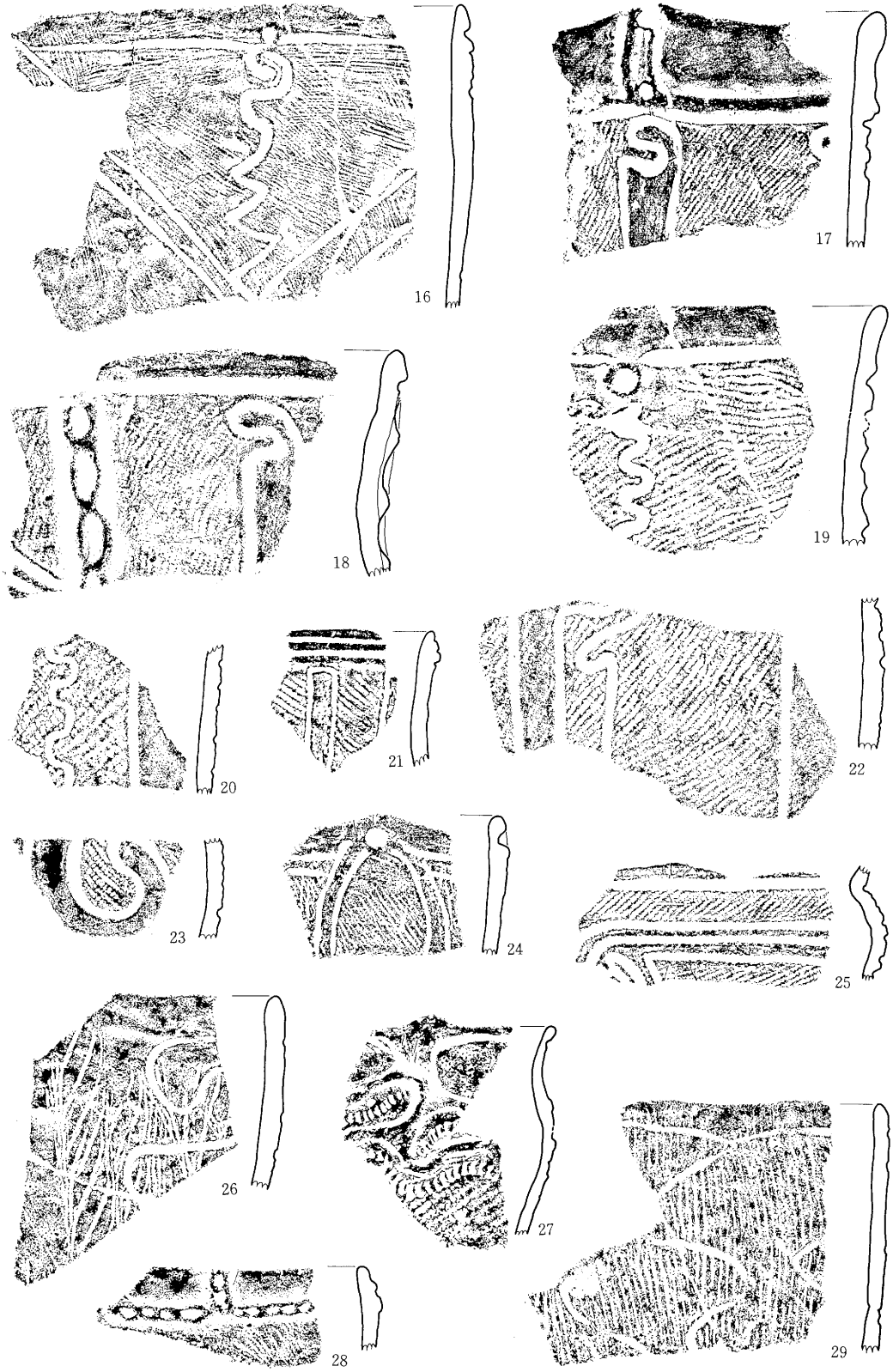


図	遺構・層位	口径 cm	器高(残存高)cm	底径 cm	文様の特徴	遺物番号
1	C15区 9b層	——	(10.9)	5.7	沈線による曲線、撚糸文R	Po—90
2	C16区 10層	13.9	(18.0)	12.1	刺突、三角文、条線を充填	Po—93

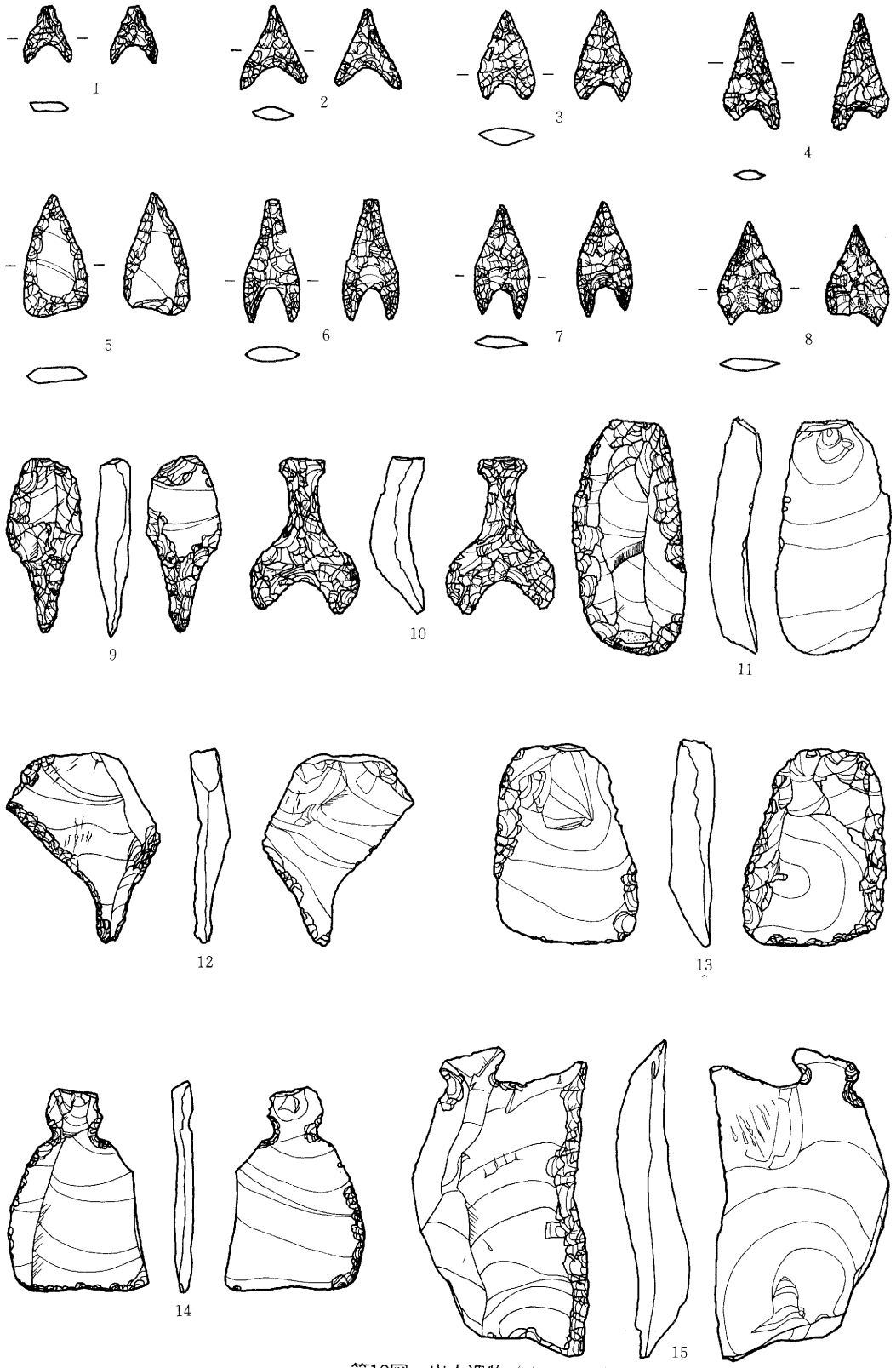
第16図　出土遺物 (3)（縮尺1/3）



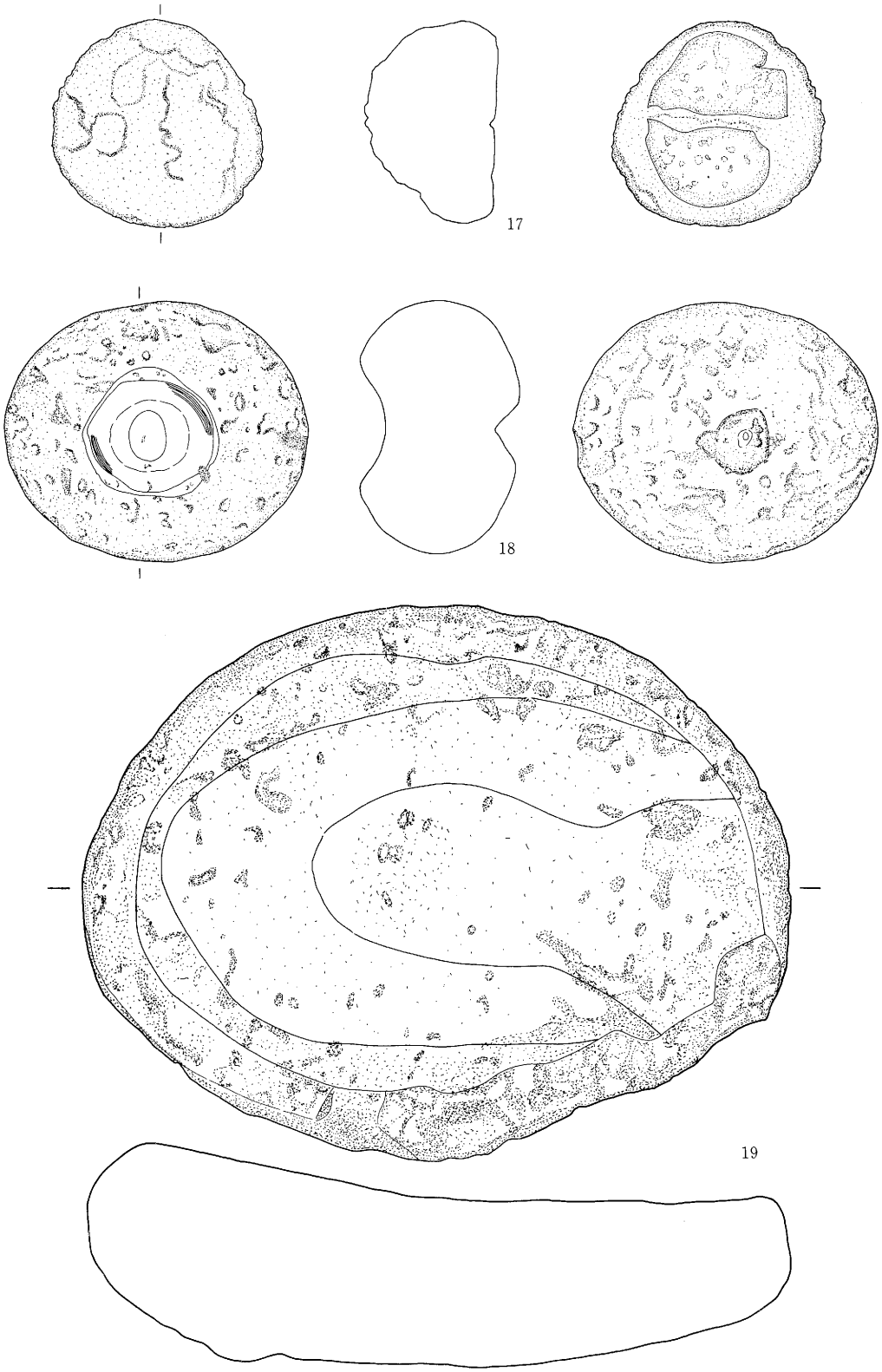
第17図　出土遺物 (4)（縮尺1/3）



第18図　出土遺物 (5)（縮尺1/3）



第19図　出土遺物 (6)（縮尺⅔）



第20図　出土遺物 (7)（縮尺1/3）

底面より約40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

〔柱穴〕　床面及び周溝内より12個のピットが発見され、そのうち、柱穴はP_1・P_2・P_6で、調査区外にも１個あり４本の柱と考えられる。又、床面下にも柱穴と考えられるP_{15}、P_{19}・P_{20}があり、改築前の柱穴である。柱穴の掘り方は60～90cmの円形、楕円形で、柱痕跡は約20cmである。

〔周溝〕　カマドの部分を除きほぼ全周しているものと考えられる。周溝は幅約40cm、深さ約20cmで、その断面形はU字形を呈する。

〔カマド〕　燃焼部はすでに壊れ、北壁に２本の煙道が構築されている。１号煙道（西側）は全長1.8m、幅45cmのトンネル式で、底面は先端に向って下り、煙り出しで垂直に立ち上がる。２号煙道は全長2.2m、幅40cmのトンネル式と考えられるが上部が小溝状遺構で切られている。底面は水平で、煙り出しは長軸70cm、短軸35cmの楕円形のピット状となり、垂直に立ち上がる。

〔貯蔵用ピット〕　P_3・P_5は円形で、深さも浅いものである。P_3は65×60cmのほぼ円形で、深さ15cmであり、焼土を多量に混入する。P_5は65×70cmのほぼ円形で、深さ10cmである。

〔出土遺物〕　各層から土師器・須恵器・鉄製品が出土している。この住居跡の年代は、最下層より国分寺下層式の土師器坏が出土していることより、この時期に属するものと考えられる。

ＳＢ１建物跡（第13図、写真34）

ＳＩ１住居跡の北側に位置し、全体の建物跡が検出されていないが、西端の掘り方の状況から２間×３間の東西棟建物跡である。桁柱列の方向はＥ－15°－Ｓである。桁行は３間、総長560cmで、柱間寸法は西より190＋180＋190cm、梁行は２間、総長430cmで、柱間寸法は北より210＋220cmである。掘り方は60×100cmの長方形で、柱痕跡は約20cmである。掘り方底面で別の柱痕跡が検出されており、同一場所に建て替えを行っているものと考えられる。

小溝状遺構　（写真35）

基本層の4c層と５層で検出されている。前者は幅20～40cmのもので、東西方向に走っている。間隔は不規則である。後者は１～15グリッドの全域に検出され、主に６～14グリッドにかけて密集している。その幅は20～50cmで、東西方向、南北方向に走り、重複している。切り合いの順序も東西方向→南北方向→東西方向である。ＳＩ１住居跡の床面を切断する南北のものは比較的深いものがある。

このほか、溝跡３条があり、ＳＤ２溝跡は平安時代、ＳＤ５・６溝跡は奈良時代の溝である。ＳＤ６溝跡は、昭和51～53年に調査をした１号溝である。

以上のことから、今回の調査で、縄文時代後期の竪穴住居跡・埋設土器遺構・配石遺構・土壙と各遺構及び包含層より多量の縄文土器・石器が発見され、さらに、奈良時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・小溝状遺構などが発見された。

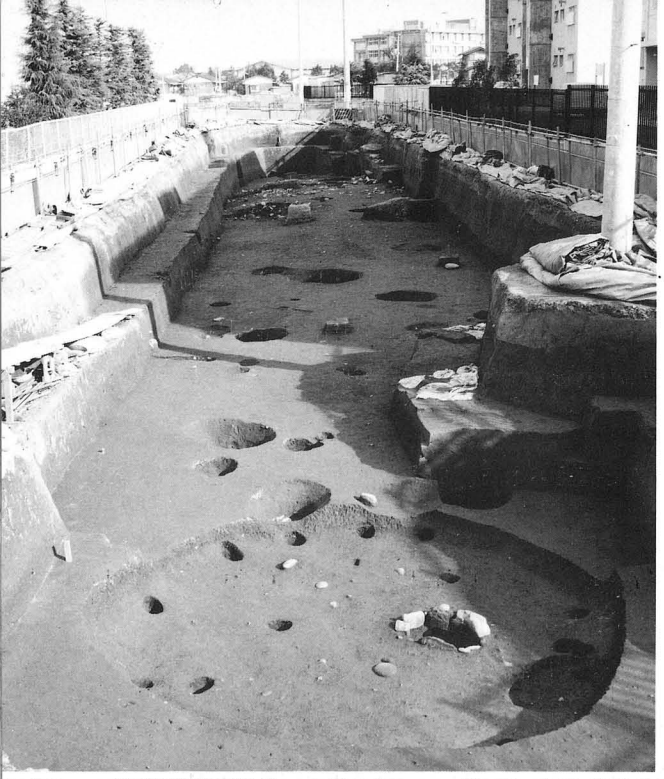


写真７　調査区全景(10層)

写真８　調査区全景（５層）

写真９　土 層 断 面

写真10　ＳＩ４住居跡

写真11　同セクション

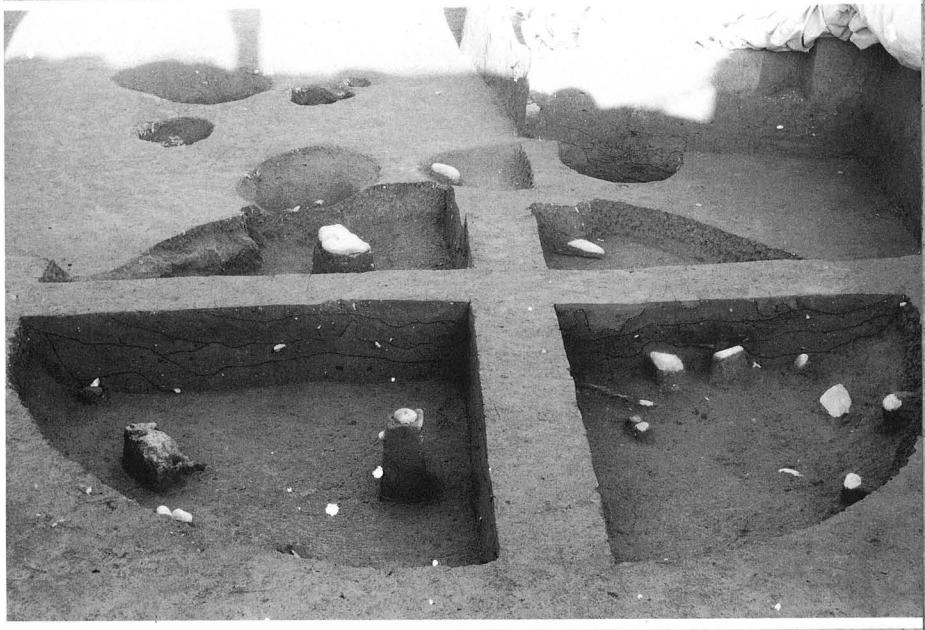


写真12　同　炉　跡

写真13　1号埋設土器遺構

写真14　2号埋設土器遺構

写真15　3号埋設土器遺構

写真16　4号埋設土器遺構

写真17　5号埋設土器遺構

写真18　2号配石遺構

写真19　2号配石下土壙
（ＳＫ22）

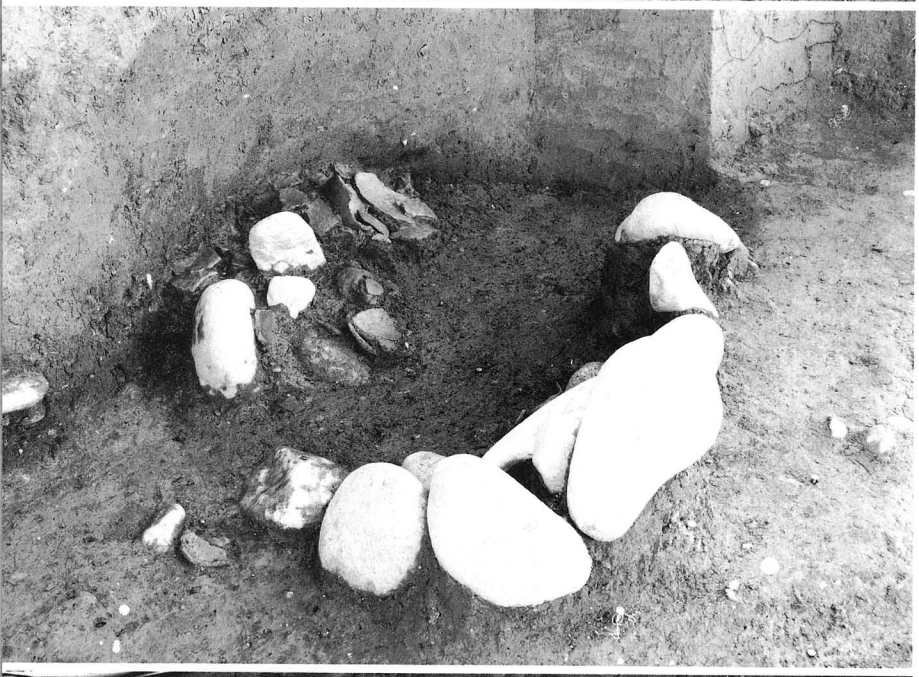


写真20　3号配石遺構

写真21　土壙群全景
（ＳＫ29～33）

写真22　ＳＫ13土壙

写真23　ＳＫ19土壙

写真24　ＳＫ21土壙

写真25　ＳＫ46土壙

写真26　遺物出土状況
（ＳＫ28）

写真27　遺物出土状況
（包含層）

写真28　遺物出土状況
（包含層）

写真29　遺物出土状況
（包含層）

写真30　遺物出土状況
（包含層）

写真31　遺物出土状況
（包含層）

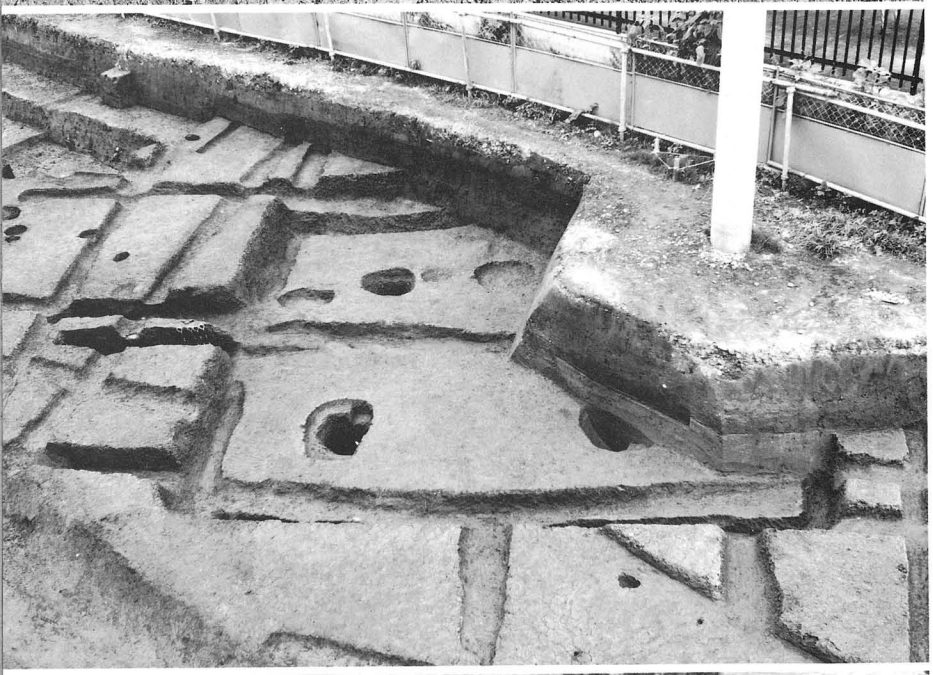


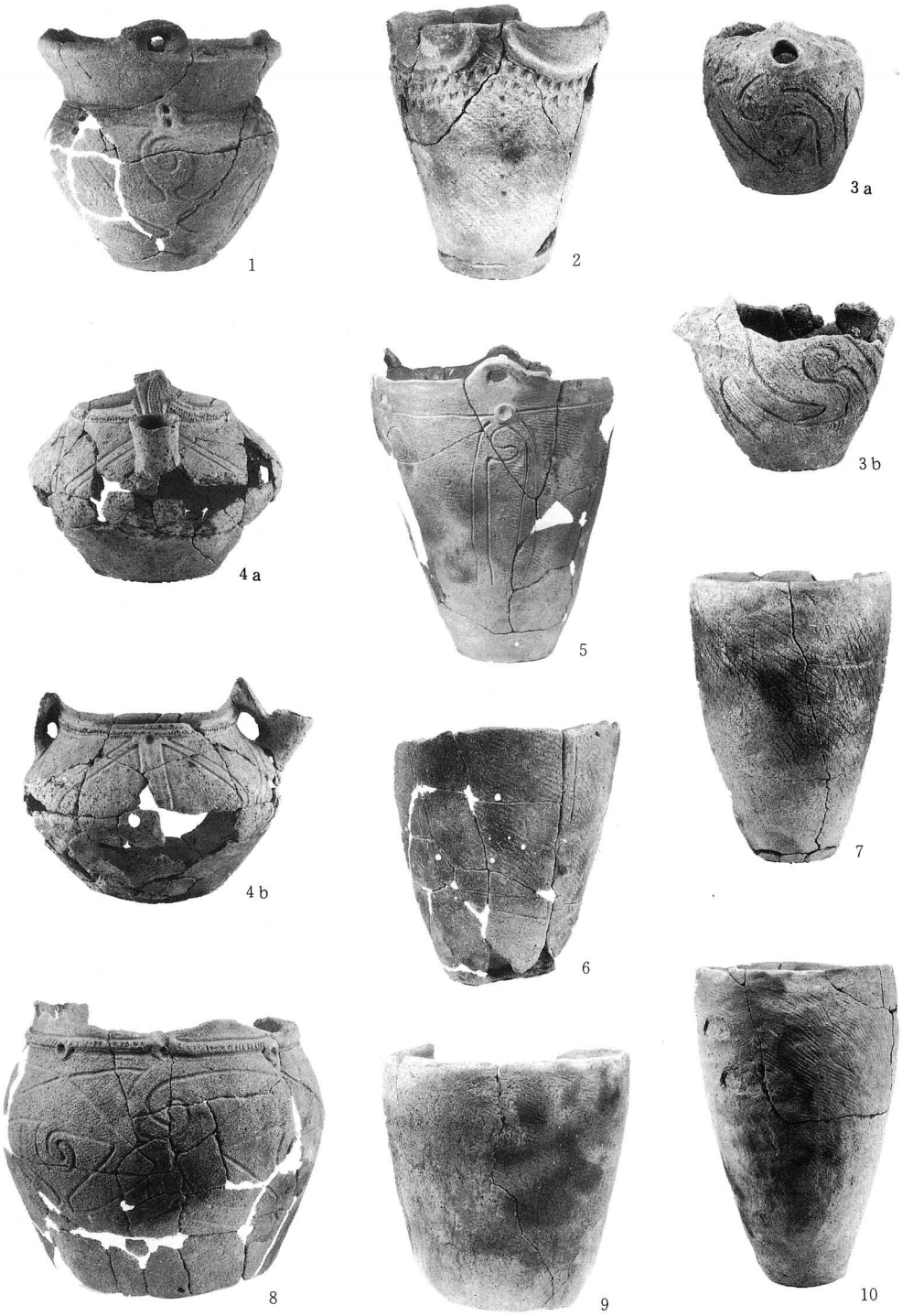
写真32　ＳＩ１住居跡

写真33　同　煙　道

写真34　ＳＢ１建物跡

写真35　小溝状遺構

写真36　ＳＤ２溝跡

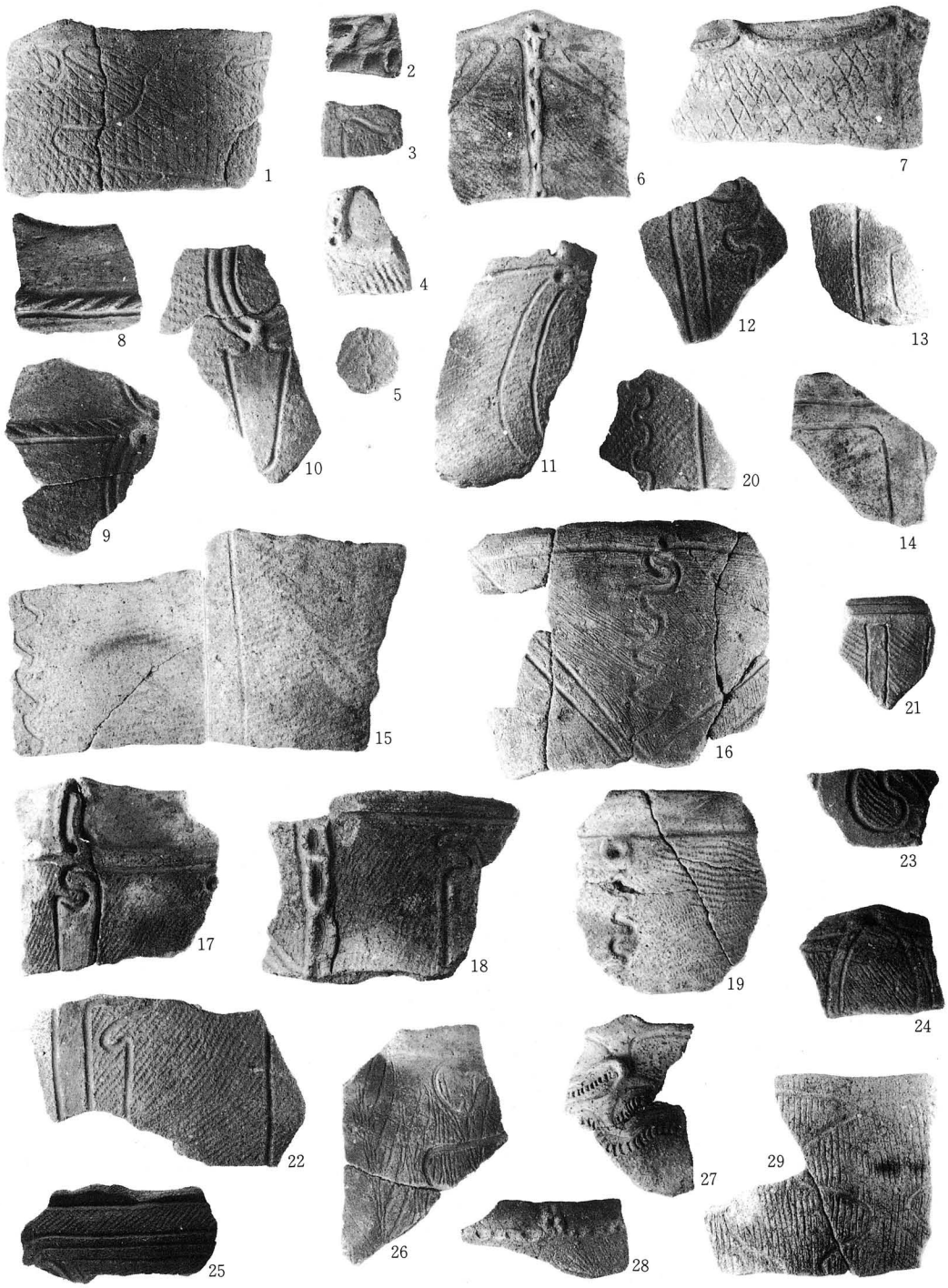


1．5号埋設土器
4．10層出土土器
8．9b層出土土器

2．10層出土土器
5．9a-2層出土土器
6．9b層出土土器
9．4号埋設土器

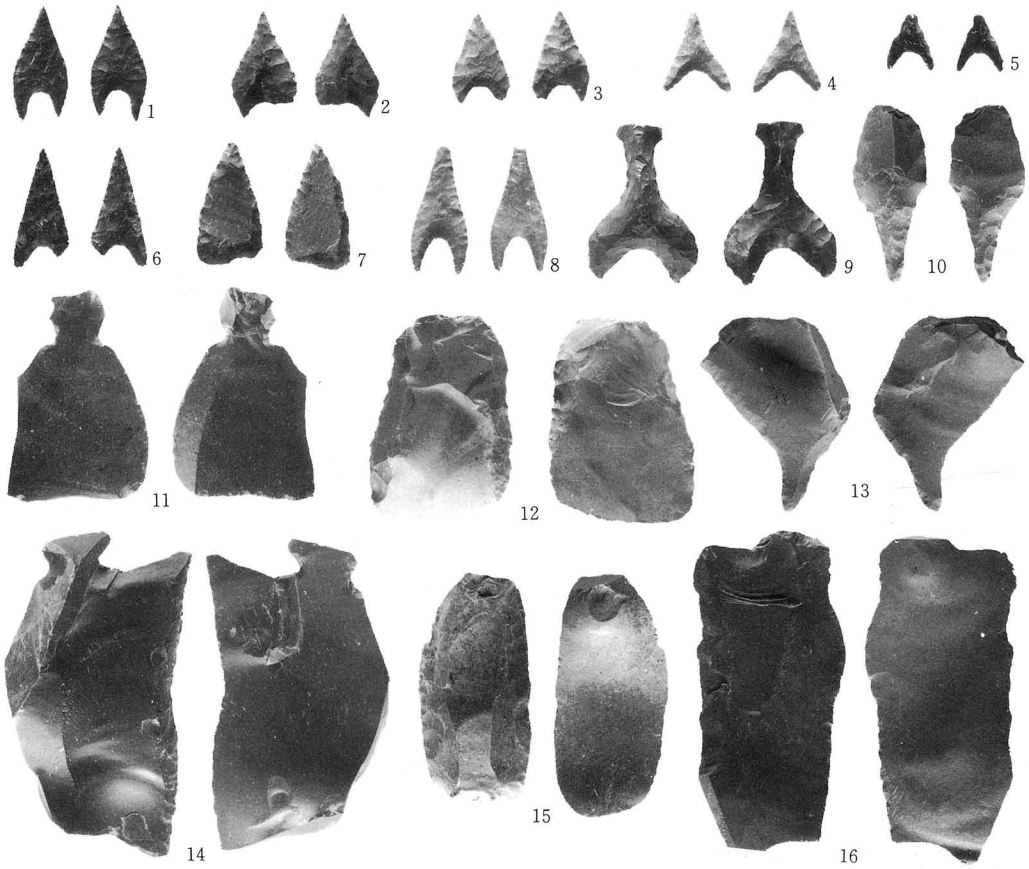
3．9b層出土土器
7．3号埋設土器
10．2号埋設土器

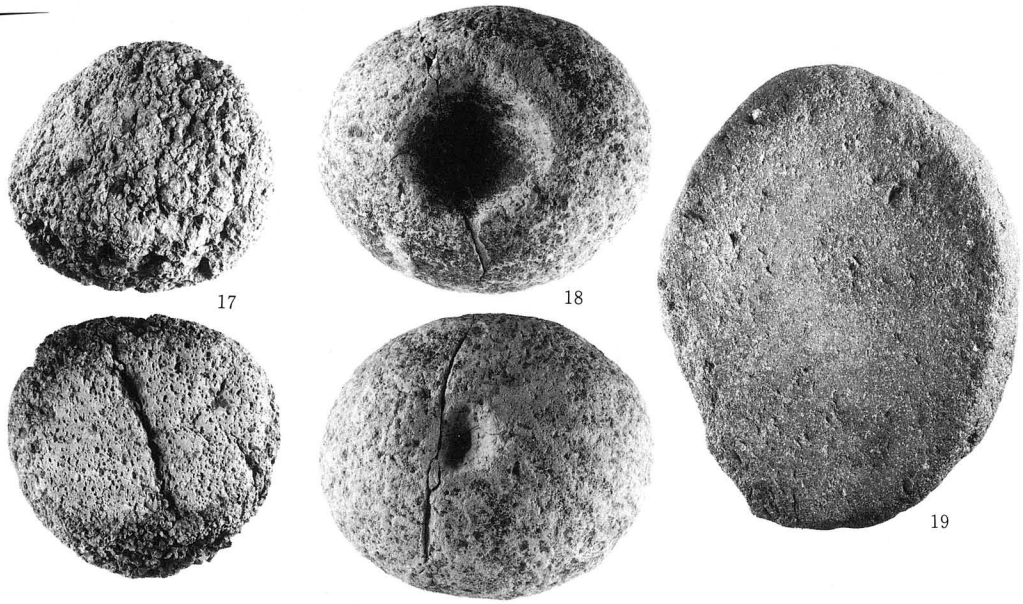
写真37　出土遺物（1）



1．ＳＩ４住居跡
2．ＳＩ４住居跡
3．ＳＩ′４住居跡
4．ＳＩ４住居跡
5．ＳＩ４住居跡
6．9b層出土
7．9b層出土
8．ＳＫ38土壙
9．ＳＫ38土壙
10．9b層出土
11．9b層出土
12．9b層出土
13．9b層出土
14．9b層出土
15．9b層出土
16．9b層出土
17．9b層出土
18．9b層出土
19．9b層出土
20．9b層出土
21．9b層出土
22．9b層出土
23．9b層出土
24．9b層出土
25．9b層出土
26．9b層出土
27．9b層出土
28．9b層出土
29．9b層出土

写真38　出土遺物 (2)





1．９層出土
2．９層出土
3．９層出土
4．９層出土
5．ＳＩ４住居跡
6．9a層出土
7．9a層出土
8．９層出土
9．9b層出土
10．９層出土
11．９層出土
12．9b層出土
13．９層出土
14．9b層出土
15．ＳＩ４住居跡
16．9b層出土
17．９層出土
18．９層出土
19．ＳＫ46土壙

写真39　出土遺物 (3)

職　員　録

文化財課		調査係		調査係	
課長	早坂春一	係長	佐藤　隆	主事	斎野裕彦
		主事	結城　慎一	〃	佐藤良文
管理係		〃	木村　浩二	〃	長島栄一
係長	佐藤政美	〃	篠原　信彦	〃	及川　格
主事	岩沢克輔	教諭	佐藤美智雄	教諭	千葉　仁
〃	山口　宏	〃	小野寺和幸	〃	松本清一
技師	桑島栄男	〃	太田　昭夫	主事	中富　洋
		主事	佐藤　洋	〃	平間亮輔
		〃	金森　安孝	〃	高橋　泰
		〃	佐藤　甲二	〃	鈴木善弘
		〃	吉岡　恭平	〃	松本素明
		教諭	小川　淳一	〃	佐藤　淳
		主事	工藤　哲司	〃	渡部　紀
		〃	渡部　弘美	派遣職員	高橋勝也
		〃	主浜　光朗		

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年３月）
第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第69集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ（昭和59年３月）
第82集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ（昭和60年３月）
第89集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ（昭和61年３月）
第101集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅵ（昭和62年３月）

仙台市文化財調査報告書第101集

昭 和 61 年 度

仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅵ

昭 和 62 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市国分町 3 － 7 － 1
仙台市教育委員会文化財課

印刷 ㈱ 東 北 プ リ ン ト
仙台市立町24—24 TEL 263—1166